
逃亡者

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃亡者

【Nコード】

N1187Y

【作者名】

シン

【あらすじ】

泣き叫び、哀願し、媚び諂い……思いつくことは、何でもした。それでも、男は、笑って、いた……。

一九八五年、華南経済圏繁栄の噂が広がり始めた中国、母親の死をきっかけに、四川省の農家から、二人の幼子が金持ちになることを夢見て、繁栄する華南経済圏の一省、福建省を目指す。二人の最

終目的地は、自由の国、^{アメリカ}美国であつた。

一人は^{グオロン}国龍、もう一人は^{シュイロン}水龍、二人は、やっと八つになる幼子だ。美国がどこにあるのか、福建省まで何千キロの道程があるのかも知らない二人は、途中に出会つた男に無事、福建省まで連れて行つてもらうが、その馬車代と、体の弱い水龍の薬代に、莫大な借金を背負うことになり、福州の置屋に売られる。

だが、計算はおるか、数の数え方も知らない二人の借金が減るはずもなく、二人は客を取らされる日を前に、逃亡を決意する。

しかし、それは適うことなく潰^{つぶ}え、二人の長い別れの日となつた……。

r u n ? (前書き)

恋愛、という言葉が適切かどうかは判りませんが、お互いを求め続けた、という意味では、間違いないのではないかと思います。

run ?

夢を創るために逃げ出したのだ——女が夢を見る生き物なら、夢を創る男として……

母が薬を飲んでいるのを、見た。

何故だかとても不安になり、胃の奥が、キュ、つと冷たくなるような心細さを、感じた。

母が死んでしまうのではないか、と思ったのだ。

今考えれば、母が飲んでいた薬、というのは、医者がくれるようなものではなく、薬草を煎じた呪いのような薬であつたのだろうが、四川省の農村で、貧しい暮らしをしていた頃には、そんな知識さえ持つてはいなかったのだ。

母は、所謂、いわゆる『雛妓』チユージと呼ばれる少女売春婦であり、まだ十代の頃に、出稼ぎ先であつた福建省で双子の兄弟を産み、その子供を四川省の実家に預け、年に数回、稼いだお金を持って、顔を見せに戻つて来ていた。

港のある福建省は、内陸部に位置する四川省とは違い、七〇年代からの改革解放によつて繁栄を約束された広州と同様、未来を望める土地であつた。その繁栄を求めて四川を始めに、中国全土から人々が農地を捨てて、その繁栄の地に集まり始めていたのだ。

中でも、人々が福建省を選んだ理由は、そこにいれば、ある日、突然、メイグオ『美国』リカに行きたくないか？』と、制服姿の警官が現れて、美国行の船に乗せてくれる、という話が、まことしやかに噂になり始めていたからで、あつた。

海に面したその都は、未来を夢見ることが出来る出発点だったのだ。

もちろん、四川省の農家に育ち、母親の帰りだけを待っていた幼い国龍と水龍には、それは単なる噂であり、決して手の届く場所にあるものでは、なかったが。

だが、その年の秋、母が、死んだ。

一九八五年——。

二人がまだ八つの時である。

いつか見た、薬を飲む母の姿が、頭の中に蘇っていた。あの時感じた不安が現実となり、二人は互いを抱き締め合って、泣いた。

農家には男手が必要であるから、売られることはないと思っていたが、それは国龍に限っての安堵であり、体の弱い水龍に取っては、お金を持つて帰って来てくれる母がいなくなった今、すぐにも押し寄せて来る不安であった。

熱を出す度にお金のかかる水龍が、貧しい農家の厄介者になることは、幼い子供でも容易に知り得たのだ。

「逃げよう、水龍。ここにいたら、離れ離れにされる」

母親の死を哀しむ間もなく、幼い二人が出した結論であった。

「でも、行くところなんて……」

「メイグオ 美国に行くんだ」

「……美国？」

「ああ。シホンシュギの夢の国だ、って聞いたことがある」

「シホンシュギ……？ なに、それ？」

「そつ、それは……っ。えーと、シャカイシュギの反対だよ」

「シャカイシュギ……？ それ、なに？」

「だから——っ。この大陸のことなんだよつ。美国は、こことはぜんぜん違うんだ。あつという間に金持ちになれるんだ」

「金持ち……。ホントに？」

「ああ。行きたいだろ？ もう熱を出したって、だれにもイヤな顔されないんだ。美国じゃ、治らない病気なんて一つもないんだ」

「国龍が行くなら……行きたい」

「じゃあ、決まりだ。——行くぞ」

「え……？　今から？　もう夜だよ」

「明日になったら、おまえはどこかへ売られるかも知れないんだぜ。それでもいいのか？」

「……やだ。国龍といっしょに行きたい」

「なら急ぐんだ。――歩けなくなったら、オレに言うんだぞ。おぶってやるからな」

「うん」

双子、といつても性格は全く違っていた。多分、体が弱かった水龍を、国龍が守る、という形がいつの間にか出来上がっていたためであつただろう。

そして、国龍は、今まで自分一人で水龍を守って来た、と思い込んでいた。確かに、水龍が寝込んだ時、薬を飲ませてやつたり、食事をさせてやつたりするのは国龍の仕事だったが、その薬代も食事代も、決して国龍が稼いでいた訳ではないのだ。

だが、水龍を売る、という話は、まだ母親が生きていた頃から持ち上がった話であり、その母親がいなくなった今、すぐにも実行されて不思議ではない話であつた。

実際、女の子しかない家では、跡継ぎを作るために、男の子を欲しがっていたのだ。多少体が弱くても、跡継ぎさえ作ればいいと。

たいていの場合、男の子は家業を継ぐために、婿養子に出されることなどなかったから、水龍のような体の弱い子供でも、女の子しかない家庭には、血を絶やさないために必要だったのだ。

そして、貧しい内陸部では、子供を捨てたり、売ったりすることは、珍しくなも、なかった。

今まで水龍が捨てられたり売られたりせずに済んでいたのは、母親が金を持って帰って来てくれていたからであり、国龍が水龍の分まで働いていたから、だっただろう。

あまりにも無謀な、そして、あまりにも懸命な、八つの幼子たちの逃避行は、その日の夜に、始まった……。

run ?

「ねエ、国龍。美国、ってどこにあるのかなあ？」

田畑の合間を進む中、水龍が大きな瞳を持ち上げた。

「そ、そんなもん、決まってるだろっ。船に乗って行くんだから、海の方こう側だよ」

「海……。海ってどんなのかなあ」

「魚がいっぱい、いるんだよ」

「じゃあ、船に乗っても食べるものに困らないねっ」

「ああ、もちろんさ」

黄色い大地の広大さも知らない頃の、会話であった。

社会主義の巨大な大陸がどれほどの国土を有しているのか、海というものがどれほどの広さを持つているのか、幼い二人に解るはずも、なかった。ただ互いに離れたくない一心だったのだ。

村の人々の噂だけを頼りに、広州や福州に出稼ぎに行っている人々の土産話だけを頼りに、ただ夢だけを抱いて歩いていった。

祖父母や伯母夫婦、親戚たちが、もつと二人を心配して捜し回ってくれていれば、或いは、二人はずっと一緒にいられたのかも、知れない。

だが、そうはならなかったのだから、今更そんな仮定を持ち出したところで、どうにもならないだろう。

畑仕事の手が減るのは困る、という理由だけで——もちろん、貧しい農家ではそれはとても重要なことなのだが、親戚一同は、人手を割いてまで、二人の行方を追おうとはしなかったのだ。もちろん、腹が空けば戻って来る、行く当てがなくて戻って来る、ということも、念頭にあったに違いない。

二人の逃避行を妨害するものは、差し当たって何もなかった。——いや、あった。

国龍が心配していた通り、夜の内には、もう、水龍が歩けなくな

つていた。ハアハア、と荒く息をつき、ぐったりと国龍の肩に凭れ掛かって来たのだ。

「ほら、背中に乗れよ。おぶってやるから」

そう言つて水龍をおぶり、歩き出したものの、国龍も、そう遠くまで歩けるほど、体力を持っていた訳では、なかった。畑から家までおぶって行くのとは違うのだ。

まだ互いに、たった八つの幼子であつた。

そして、歩いて歩いても、目指す海が見えて来ることは、全く、なかった。

秋草の露も、小さな足を辛くするだけのものだったのだ。

その日の夜は、何もない草の上で、眠りについた。

「……さむい」

「待つてろよ」

上着を脱ぎ、国龍は、体を縮める水龍の肩にかけてやつた。そして、自分もその上着の中に潜り込み、ぴったりとくっついて、寄り添った。

「こうしていれば、さむくないだろう？」

「うん」

いつも、そうしていたのだ。寒い冬の日も、そうして眠れば、体はすぐに暖まつた。

その日もまた、同じであつた。

多分、不安もなかった。

もちろん、二人には、後どれくらい歩けばいいのかも、何日こうして過ごせばいいのかも、全く解つてはいなかったが、それでもまだ、それが不安の要因になることはなかったのだ。

まだ一日目であり、二人の胸には、夢と希望だけが存在していた。船に乗つて美国^{アメリカ}へ行けば、全て変わる。そう信じて疑つてはいなかった。

二日目も、夢を見ていれば幸せだった。
だが、三日目は――。

「おながが空いたよ、国龍……。もう歩けない……」

「歩けない？ おまえはちつとも歩いてないじゃないかっ！ いつだってオレがおぶってやって——。オレの方がよっぽどおながが空いて、疲れてるんだっ」

まだ子供、だったのだ。

いつまでも弱い水龍のことばかり気遣ってやれるほど、国龍は「出来た人間」では、なかった。疲れて、おながが空いて、足が痛くて、頼れる人間がどこにもいなくて、苛立ちばかりが募っていたのだ。

「だって……歩けなくなったら、おぶってやる、って……。国龍がそう言ったから……」

「おまえを可哀想だと思ったからだろっ！——おまえなんか連れて来るんじゃないかった。オレはあの家にも良かったんだ。おまえと違って仕事もできるし、売られる心配もなかったんだ。オレは、おまえが可哀想だと思ったから、連れて来てやったんだ！」

多分、誰もが予測していたことだったかも、知れない。八つの子供に、相手の気持ちを考えてやれ、という方が無理なのだ。まだ自分のことさえ、自分一人では持て余す、非力な存在でしかなかったのだから。

run ?

「歩けないなら、おまえはここにいろよ。オレは一人で行くからな」
国龍は、ふんつ、と鼻を鳴らして、歩き始めた。もちろん、水龍が後からついて来る、と信じて歩き出したのだ。

多分、一人で生きて行けないのは、水龍だけでなく、国龍も同じだった。——いや、むしろ国龍の方が、一人になることに脅えていた、と言つてもいい。水龍がいてこそ、国龍は強い人間でいられたのだ。

母が薬を飲む姿を見て不安になったように、国龍に取つて、自分一人取り残されることは、何よりも恐ろしいことであつた。

苦しい呼吸が後からついて来るのを感じて、国龍は、その時も、安堵していたのだ。

「……たく。しょうがねーな。来いよ。おぶつてやるから。食べ物、夜になったら何か持つて来てやるさ」

面倒臭げに言いながらも、水龍が自分がいなければ生きて行けないのだ、ということを確認した気分になって、国龍はとても満足していた。

疲れた時に頼られても腹が立つが、全く頼られないと、もっと腹が立つのだ。

「ごめんね、国龍」

その言葉だけで、また歩いて行くことが、出来た。

そして、悪いことでも何でも、出来るようになっていた……。

四川省は中国の内陸部であり、中国最大の重化学都市たる重慶や、四川省の省都たる成都を除けば、ほとんどが農村である。

今でこそ、成都には多くの外資系企業や、台湾、香港企業が企業

活動の認可を受け、活発に活動しているが、それでも、農家は貧しいままであった。

幼い二人が逃げ出した頃は、さらに。

広東省から重慶までが三〇〇キロというなら、四川省の農村部から福建省までは、さらに長い道程があっただろう。子供の足では、辿り着くことなど出来ない距離だったのだ。

それでも二人が辿り着くことが出来たのは、大人の助けがあったからである。

「こら、そこで何をしているんだ！」

牛の糞の臭いを我慢して、暖かさを求めて小屋へ入ろうとした時、そう言つて二人を怒鳴りつけた人物が、それであった。

聞けば、その人物は村には必ずいるという「業者」の一人で、福州や広州の間を行き来している、という。

国龍と水龍が、福州から美国へ行きたいのだ、と言うと、小柄なその男は、マジマジと二人の顔を眺めて、こう言った。

「フン……っ。子供にしてはきれいな顔立ちだな。女の子なら、もっと良かったんだが——。福州へ行きたいのなら、わしが連れて行つてやるう」

その日から、二人は辛い思いをして歩く必要も、進むべき方向に迷うこともなくなった。決して快適とは言えなかったが、馬車の荷台に乗っていれば良かったのだ。

もちろん、水龍は馬車酔いして吐いたり、熱を出したりも、した。馬車が止まってからも、まだ体が揺れているような気がして、体中が痛くなったりも、した。

「もう熱冷ましの薬がないんだから、これ以上、熱を出すなよ」無理なこととは解っていたが、国龍が言つと、水龍は、コクリ、とうなずいた。

だが、やはり熱を出した。

その時も、小柄な男は、親切に水龍のために薬を調達してくれたのだ。もちろん、そのお金は、福建に着いたら、働いて返すことに

なっていた。

七〇年代からの改革解放で、沿岸地方は、内陸部の農家の何倍も金が稼げる、ということだったのだ。

「やさしい人だね、あのおじさん」

「……」

水龍の言葉に、国龍は何故かうなずくことが出来なかった。

多分、性格もあつたのだろう。国龍是水龍のように人懐っこくもなく、他人とすぐに打ち解けるような人間ではなかったのだ。

それは、小さい頃から（今でも小さいが）、人に頼り続けて来た水龍と、面倒を見てやる側だった国龍の違い、だったかも知れない。

時には、母親に逢いたい、と言って泣く水龍を宥めたり――また、国龍も一緒に泣いたりも、した。

母親が死んだ、ということは解つていても、もういなくなった、ということが信じられずにいたのだ。

そして、福建へ着けば、何故か、母親に逢えるのではないか、というような気さえ、していた。もちろん、そんなことはあり得ないことなのだが……。

run ?

古くから対岸貿易港として発展した福州は、福建省の省都であり、漢代の紀元前二〇二年に？越王が都と定め、唐代には、福州府が置かれた古都である。

アヘン戦争の後に開港された五港の内の一つでもあり、日本とも縁が深い。

もちろん、そんなことは、幼い二人の兄弟には、何の関係もないことであつたが。

「海だよ、国龍。海が見える！」

馬車から指を差してはしゃぐ水龍の言葉に、豪快な笑いを飛ばしたのは、小柄な男であつた。

「ハッハッ！ あれは河だよ。ミン江だ」

福州は、この福建省最大のミン江河口に存在しているのだ。

「やーい、水龍のバーカ。河と海を間違えてやんの」

「国龍だつて知らなかったくせに」

「オ、オレは知ってたさ」

その街はまるで、異国のようであつた。

天高く聳える白い白塔バイタと、黒い烏塔ウータは、さながら世界を見下ろすことが出来る神の位置であるかのように二人を見下ろし、見たことのない大きな建物は、もう開いた口も塞がらないくらい、ドキドとする何かをもたらしてくれた。

港がある、ということとは、いつの世も街に繁栄をもたらしてくれるものであつたのだろう。

だが、二人が連れて行かれたのは、ゴミゴミとした薄暗い雰囲気、の、掃き溜めのような一角であつた。

おまけに、人々の話す言葉さえ、ほとんど聞き取れない状況になつていた。

巨大な中国大陆では、地方によって、話す言葉が違うのだ。四川

で育った二人に取って、福建人の話す？南語（福建語）は、異国の言葉に等しかった。

もちろん、幼い子供であつた分、大人のように、田舎の言葉を恥ずかしい、と思うことはなかった。

二人をここまで連れて来た小柄な男は、四川訛りの残る？南語で、何やら別の男と話をしていた。時々、国龍と水龍の方を垣間見たりしている。

「あの人が美国に連れて行ってくれるのかなあ？」

小柄な男と話をする、もう一人の男を見て、水龍が言った。大柄で、二人を連れて来てくれた男とは、全く対照的な体軀をしている。「すぐに美国に行ける訳がないだらう。おまえの薬代とか、馬車代を返さなきゃならないんだ」

「あ、そーか」

呑気な二人の会話を傍らに、男たちの交渉は続いていた。

「女の子ならいくらでも買い手はあるが、男の子じゃあなア……」

歪んだドアの前に立つ大柄な男が、顎に手を当てて渋ってみせた。「あれだけきれいな子なら、欲しがる奴もいるだらう？」

小柄な男が、また、二人の方を垣間見る。

「まだ小さ過ぎるさ。うちは、九つになってからでないと売らないんだよ」

「じきに九つになるさ。見かけは小さいが、二人とも、もう八つだ」

「……仕方がないな。——おい、坊主、こつちへ来てみる」

男の呼び声と手招きに、二人は顔を見合わせながら、トコトコと歪んだドアの前へと足を向けた。

男が二人の背丈まで身を屈め、国龍から順番に、顎に指を掛けて、じろじろと顔を眺め始める。

「……なるほど。汚れてはいるが、きれいな子だ」

「それほどでもお……」

と、照れながら、国龍。

人に褒められることは、嬉しいものである。

「ハクシュンっ！」

それは、水龍のクシャミであつた。しかも、男がマジマジと顔を眺めている時だつたから、タイミングが悪い。

「水龍のバカっ！ 鼻水がおじさんの顔についちゃったじゃないかっ。あーあ、鼻クソまで——。クシャミくらい我慢しろよっ」

「だつて……」

「あーっ、もう、汚いやつだなっ」

などと言いながら、国龍は、鼻水よりも汚いと思える服の袖で、男の顔をゴシゴシと拭いたりしている。それが、純粹な好意であつたことは、確かだろつ。いつもの如く、手の掛かる水龍の面倒を見るように、怒られる前に気を遣つてやつたのだ。

「ごめんね、おじさん。こいつ、すぐ体をこわすから。オレ、ちゃんと二人分、働けるからさ」

男が沈黙だつたことは、言うまでもない。これ以上はない苦い顔で、ぷるぷると肩を震わせている。

プーン、と牛の糞の臭いさえ漂う服の袖口で顔を拭かれては、それも当然のことだつただろつ。

普通、服というものは柔らかい感触だが、その服はパシパシに強ばつていたりしたのだ。

小柄な男も、肩を揺らして、懸命に笑いを堪えている。

run ?

「……坊主、その服はいつから着てるんだ？」

やっと口を開いた男の言葉であつた。かなり怒りを抑えていると思える、低い声である。

それに、その男もともと四川の人間なのか、二人には福建語を使うことはしなかつた。

同郷、血縁で繋がる中国人は、離れていても、その「地と血の繋がり」を持つてして、お互いの便宜を図り合うのだ。二人の男は、そういう地縁血縁で繋がっていたのだらう。

「えーと……。オレ、数のかぞえ方、わかんないし……」

少し照れながら、国龍は言つた。読み書き計算が出来ないことは、やはり子供でも恥ずかしいのだ。

もちろん、汚い服を着ているほうが、もっと恥ずかしい、という意見もある。

だが、そうして恥ずかしげに頬を染める国龍の姿は、誰が見ても可愛いものだつたに、違いない。ただし、何日着ているか解らない服で顔を拭かれた男以外。

「なるほど。体だけでなく、頭の中にも虱みみしがわ蛆うすいていそうだな」

「えーっ！ 耳から入つたのかな？ ぜんぜん気がつかかつた」

「……」

絶句。

どうやら、男の方に返す言葉はないらしい。

福州に来て、有頂天になっている二人には、明るい未来しか見えていなかったのだ。

「ぼく、草の上で寝てたとき、国龍の鼻の穴にアリが入つて行くのを見た」

「えーっ！ 何ですぐに言わないんだよ、このバカっ！」

「だって……見てる間に入つてつたから……」

「おまえはいつもそうやって、ボー、つと見てるだけなんだよつ。
グズつ。のろまっ」

「だって、国龍がすぐにクシャミをしたから、アリはきつと飛ばされちゃって……。それに、国龍、ムリに起こしたらきげんが悪いし――」

「もういいつ！ おまえらの話を聞いてたら頭が痛くなる。さつさと中に入って、風呂に入れてもらえっ」

疫病神に取り憑かれてしまったかのような、男の叫びであった。

「おまえが鼻水をかけたりするから、怒られたんだぞ、水龍。仕事がなくなったらどうするんだよっ」

「ちがうもんつ。国龍が汚い服で顔をふいたりするからだもんつ」

最早、それだけの次元の問題ではないと思えるのだが、罪のなすり合いは、子供同士のケンカでは、ごく一般的なものであった。

口だけなら、水龍も結構、気の強いところがあるのだ。この辺りは、さすがに双子と呼べるものであっただろう。

家の中に入り、風呂場で洗濯物のようにゴシゴシと洗われた二人は、再び、大柄な男を前にしていた。

お世辞にも「きれい」とは呼べない一室で、のことである。

クモの巣の張った天井と、黄色く染まったカーテン、ヒビの入った壁、奥にある鶏小屋から漂う独特の臭い、煙草の臭い、人間の臭い……それらが染み付き、暗く淀んだその部屋で二人が聞いた言葉は、借金の金額で、あった。

「……^{チツチエンコ}一千圓（元）？」

水龍の薬代と、ここまでの馬車代は、一千元という途方もない金額になっていた。

その金額を、大柄な男は、あの小柄な男に立て替えて支払った、というのだ。

さらに、美国に行くには、その何十倍もの金がいる、という。

数の数え方さえ解らない二人には、もう想像すらできない金額であった。もちろん、最初の一千元という金額も、何度も説明を受け

なければ、解らなかつた。

「まあ、借金を返したら、渡航費用の一割を稼いで、残りは美国に着いてから返すことになるだろうな」

男はそう言い、

「おい、^{ナイナイ}?? (婆婆)、このチビにも仕事を回してやってくれよ」

と、干からびた、いかにもごうつくババア、といった感じの老女に声をかける。

老女は、フンっ、と鼻を鳴らただけであつた……。

run ?

二人の仕事は、着いたその日から、あった。掃除や洗濯、食事の支度の手伝い、鶏の餌やり、小屋の掃除……やることは多かったが、それでも農家での力仕事や、あちこち走り回る仕事に比べれば、随分、楽なような気がしていた。

一週間後に、二人合わせて、七元のお金をもらったが、それは、借金の返済と、ここでの食事代、洋服代に消え、手元には全く残らなかった。

返済に回す稼ぎよりも、食事代や雑費の方が多くかかるのだ。

数週間働いても、借金を返せる見通しはおろか、美国へ行くための金が溜まる見通しさえ、全く、つかなかった。

そんな生活に不安を感じていた時、婆婆にこう言われたのだ。

「早く金を稼ぎたきゃ、客を取ることだね」

「……客？」

国龍も水龍も、その言葉の意味を知らない訳では、なかった。置屋に売られる子供はたくさんいたし、ここも、その置屋の一つであったのだ。

だが、それは、二人よりもっと大きな、それも女の子の話であり、男である彼らには関係のないことであつたはずなのだ。

「おまえたちのように、きれいな男の子と遊びたがる客もいるのさ。男の子は九つになるまで客は取らせないが、やりたいものを止めやしないよ」

「……」

やりたいのか、やりたくないのかは、国龍にはまだ、判らなかった。——いや、それで金が稼げるのなら、多分、やりたかった。ただ、それがどんなことであるのかまでは、解らなかったのだ。客が、幼い子供とどういう風に遊びたがっているのか。

「ぼく……ぼく、やだ……。女の人が泣いてたの、知ってる……」。

男の人にいじめられて、たすけて、とか、ゆるして、とか言つてた……」

国龍の服の裾をつかんで、水龍が言った。

その水龍の言葉を、心底楽しげに笑い飛ばしたのは、婆婆であつた。

「ハッハッ！ 女は男に乗られて喜んでいるのさ。あんまり良くつてね。——おまえたちも、九つになったら厭でも客を取なきやらないんだから、それくらいは覚えておきな」

と、齒の抜けた薄気味悪い口で、ニヤリ、と言つ。

「……九つになったら？」

「ああ、そうさ。たつぷりと稼いでもらわないとね」

その婆婆の言葉に、水龍はすっかり脅えていた。客に苛められている女の声を聞けば、誰でもそうなるだろう。今にも死んでしまひそうなほどの、苦しげな声を上げるのだ。

だが、国龍は——。

「オレ……オレ、やってもいい。金たくさんくれるのなら、明日から、やる」

「……国龍？」

目を瞠つたのは、水龍であつた。

「女の人が、いじめられて泣いてたんだよ。ひどいことされるんだよ。それなのに——」

「うるさいなつ。どうせ九つになったらやるんだから、いっしょだろつ」

怖くなかった訳ではないのだ、国龍にしても。それでも、お金が欲しかったし、何より、水龍の前で怖がっているところを見せるのは、小さなプライドが許さなかつた。

「ホウ。いい眼をした坊やだ」

もう引くことも、出来なかつた。

「オレ……やるけど、どうやったらいいのかわからないし、どんなことするのも……」

「ただ客に言われた通りにしていればいいのさ。横になって寝ていれば、すぐに済む」

「……」

その日の夜、国龍は、なかなか寝付くことが出来なかった。水龍が眠っているのを確かめては、婆婆のところへ「やっぱり、やめる」と言いに行こう、と何度も思った。

だが、結局それは、出来なかった。

今から思えば、幼い子供に無理やり客を取らせることより、自分の意志で客を取らせることの方が、よほど残酷なことであったに、
違いない……。

run ?

「ほう、この子かい。きれいな子だ」

男の臭い息が、顔に、かかった。

「さあ、服を脱いで、こっちにおいで」

嫌悪と恐怖、不安と強がりが入り交じる中、国龍は、言われるままに、服を脱いだ。今日のために着せてもらった、きれいな清代の中国服である。立て襟に紐ボタンのその服は、心地よい肌触りさえ備えている。

これから何が始まるのかは、こういう状況になっても、まだ一向に解ってはいなかった。多分、女たちのように、体を舐め回されるのだろう、と思っていた。それくらいなら我慢できると思っていたのだ。それに、それだけのことでたくさんのお金がもらえるのなら、一日中、埃や鶏のフンに塗れて働くより、ずっと楽だと思っていた。何より、どうせ九つになったらしなくてはならないのなら、今から始めても同じだ、と思っていたのだ。

「子供はこれくらいの年が一番、愛らしい……ナイナイ……?? もい
い子を見つけて来るものだ」

男は匂いを嗅ぐようにしながら、幼い肌に顔を近づけ、自らの屹立した欲望を、取り出した。吐き気がするほどに醜い色と形をした、肉棒であった。先端は濡れ、饅えた匂いさえ、放っている。

国龍はあからさまに顔を顰め、居心地の悪さを表すように、キョロキョロと部屋の中を見回した。——といって、何がある、という訳ではない。汚いベッドだけを置いた、狭い部屋なのだ。入り口にもドアはなく、腐った色の布だけが、掛かっている。

それは、どこの部屋も同じであった。

つい昨日まで、国龍も、その布の向こうから、水龍と一緒に、客を取る女の姿を覗いていたりしたのだ。あまりの声に、何か化け物でもいるのか、という恐ろしさと、好奇心のためであった。

だが、いたのは、男と女。

男の尻の動きだけが滑稽で、水龍が女の悲鳴に脅えているのも構わず、国龍はわりと楽しんで眺めていた。

「この愛らしさ……」

男の手が、国龍の中心を弄り始めた。

国龍に取っては、たとえ自分のモノでも、愛らしい、という形容詞は思いつかないものである。

それでも、婆婆に言われた通り、おとなしくしていた。客も何も言わなかったので、その場にずっと、突っ立っていた。

指が、少し強く、前後に動いた。

「……そんなことしたら、痛い」

そう言うと、

「ああ、まだ剥きはしないさ」

男はあっさりと手を放した。そして、こう呟いた。

「どうやら、本当に初めてのようだな。暴れもしない」

もちろん、国龍には、そんな男の言葉の意味など、解らなかった。ベッドにうつ伏せにされても、もう指で弄られずに済む、とホッとしていたのだ。

だが、その次に起こったことには、体を緩めたままではいられなかった。

実際には、何が起こったのか、解らなかった。

体が裂けた、と思ったのが一つ。

そして、火で体を焼かれた、と思ったのが一つ。

それから、大量の爆竹を小さな穴の中に押し込まれた、と思ったのが一つ。

爆竹の火薬が、一気に炸裂したかのような、衝撃であったのだ。突然の凄まじいその痛みに、国龍は声すら上げることが出来なかった。

それから、泣き叫び、哀願し、媚び諂い………思いつくことは、何でもした。

それでも、男は、笑って、いた……。

run ?

その日、国龍は、もう二度と客は取りたくない、と泣いて婆婆に懇願した……。

それから国龍は、何度もその日の夢に魘され、その内の何度かは、水龍の声で起こされた。

「国龍、国龍、だいじょうぶ？ また、あの夢？」

心配げな水龍の眼差しは、同時に途方もなく腹立たしいものでもあった。自分がこんな思いをし、水龍が働けない時は、二人分の仕事をしているのに、という憤りのためだったかも、知れない。

「さわるなよっ！」

そう言つて、水龍の手を振り払ったことも、あった。

そして、ケンカになるのだ。

「あれは、国龍が自分でやる、つて言つたんじゃないかつ。ぼくはやめた方がいい、つて何度も言つたのにっ」

「おまえがいなけりや、あんなことはしなくても良かったんだ！」

「そうやって、国龍はいつもぼくのせいばかりするんだっ」

「本当におまえのせいなんだから、当然だろ。おまえなんか、連れて来なけりや良かった。さっさと売られちまえば良かったんだよっ」

平気で、お互いを傷つけるようなことも、言い合つた。

それでも、国龍にも、水龍にも、互いの存在だけが、心の拠り所であつたのだ。同じ時に、同じ場所で生まれ、ずっと一緒に育ち、その互いの分身が、一番大切なものであった。

双子の兄弟とは思議なもので、多分、互いの存在は、母親よりも大切なものであつただろう。

「……ごめんね、国龍。ぼく、ちゃんと働くから……」

「……」

「最近、ずっと熱も出ないし、これからも出ないと思うし……。きつと、薬がいいんだと思う」

「……薬？」

「うん。最初にここに来た日に、鼻水かけたおじさんに、もらった。よく効く薬だから、って――」

「バカっ！ そんなもん受け取るから、借金がへらないんじゃないかっ。このマヌケ！ チビっ」

チビはお互い様である。

それに、借金が減らない理由は、きつとそれだけではなかっただろう。どんなに働こうと、計算が出来ない二人には、その差し引きさえ出来なかったのだ。それに加えて、利子、という訳の解らないものまでついている。それが大きな原因であったのだ。

そして、そうして絞り取られている人間が、ここには何人もいることも、二人には解らないことであった。

結局、寒波が通り抜ける季節になっても、暖かい風が吹く頃になっても、二人の借金が片付く見込みは、全く、なかった。

夏がくれば、九つになる――そんな日も、もうすぐそこまで近づいていた。

あの日の痛みは、国龍にはもう思い出せなくなっていたが、それが凄まじい痛みであったことは、夢を見るまでもなく、確かな恐怖として残っていた。

そのせいかどうかは判らないが、幼い日の記憶を、国龍は、水龍ほど鮮明に思い出すことが出来なくなっていた。

こんなことがあったね、と言われても、そのことを覚えていないのだ。

「逃げよう、国龍。ここから逃げよう」

驚いたことに、そう言って話を持ちかけて来たのは、普段、国龍に頼りっぱなしの、水龍の方であった。もちろん、目の前に迫った

「客を取らされる日」に脅えていたのだろうが、いつも『国龍が行くのなら、ぼくも行く』『国龍がそうするのなら、ぼくもそうする』と言っていた水龍のものとは思えないほどに、大胆、且つ、不敵な言葉であった。

その日の内に、二人は逃げ出す決意を固めていた……。

run ?

「ガキが逃げ出したぞ！」

迷路のような暗い置屋の中を駆け抜ける中、そんな男たちの声が、すぐ後ろに迫っていた。

二人は鶏小屋を突っ切って、裏の路地へと飛び出した。

バタバタバタ、と鶏が派手に羽根を広げて暴れ回る。

「畜生！ このクソ鳥がつ！」

男たちの悪態が、耳に届いた。

だが、大人の脚力と腕力は、鶏くらいで怯むものではあり得なかった。すぐに二人の背後へと距離を縮め、幼い子供たちを追い詰めた。

加えて、水龍がハアハアと息を切らし始める。

「はやく来い、水龍！」

国龍は、水龍の腕をつかんで、引っ張った。

疲れていたところに手を引っ張られて、足が纏れたのだろう。

「あ——」

水龍が見事につんのめった。

ズザザ——っ、と派手に地面を擦り、手足と顎を、存分に擦りむく。

もうそれまで、だった。たとえ水龍が転ばなくとも、二人に逃げるなど出来なかっただろう。

「金も稼がず、逃げられるとも思っていたのかい、坊主？ 面倒をみてやった恩も忘れて」

大きな手が、水龍の首根っこをつかみ取る。

猫を扱うような、仕草であった。

「やめろお——っ！ 水龍を放せっ！」

国龍は男につかみ掛かった。が、すぐに背後から、別の男に押さえ付けられる。

「放せつたらつ！ 水龍は体が弱いんだつ」

どれほど暴れようと、男の手が緩むことは、なかった。それだけでなく、パシーン——っ、と凄まじい平手を食らうことになった。

「くう——っ！」

衝撃に顔が引きつった。痛みよりも、痺れの方が強かった。

「付け上がるなよ、メスガキが」

「あ……う……う……」

「逃げようとすればどうなるか、たつぷりと教えてやろうじゃないか。二度と逃げる気が起こらなくなるように、な」

その日、二人は死ぬほど、殴られた……。

「——ったく。こんなに殴っちまって。売り物にならなくなっちまうじゃないか」

婆婆の小言はその日に始まったことではなかったが、包帯とガーゼだらけの二人を見てのその小言は、いつもより数段、苦々しいものであった。

「最初にそれくらい叩き込んでおかなきゃ、ガキなんてもんは、いくらでも付け上がっちゃうのさ」

殴った男の一人が、言う。

「顔を殴るのはやめとくれ。じきに九つになるんだよ、この二人は」

「逃げなきゃ、殴りやしねえさ」

そんな会話は、意識も朦朧とした二人の耳には、届かなかった。指一本動かすことも出来ないほどに痛め付けられ、全身、酷い熱を持っていたのだ。

その熱が引くまでに、数日、かかった。

「ほら、口を開けろよ、水龍」

まだ起き上がることが出来ない水龍に、国龍は欠けた茶碗から、お粥をすくって食べさせてやった。

湯気を立てるその粥は、熱のせいで余計に味のないものになっていたが、今さら文句をつけることも出来ない、いつもの食事である。水龍が、まだ腫れの残る口を開き、レンゲから流し込まれる粥を、嚥下する。

こんな生活で心が荒まない方が、どうかしていただろう。二人が笑う回数も、減っていた。子供らしくない冷めた瞳に変わっていた、と言ってもいい。

だが、まだ互いの存在があることで、心の一部は救われていたのだ。もし、これが一人で受けた傷なら、とうの昔に人間らしい心など失っていただろう。

ポタ、つと水龍の頬に、暖かい涙の雫が、零れ落ちた。

「……泣いてるの、国龍？」

喋り辛い口で、問いかける。

「くやし……い……」

「え？」

「くやしくて……。オレ……こんなつもりじゃ……なかったのに……」

……

「……」

「金持ちに……なりたい……。どんなことをしても、美国に……美国に、行きたい……」

まだ九つにもならない幼子が零した、悔し涙であった。

ポタポタと零れ落ちる涙の雫は、正視してられないほどの痛ましさであった。

そして、そんな国龍の心は、水龍が一番よく知っていただろう。国龍はきつと、水龍にいいところを見せたくて、美国で金持ちになりたい、と思っていたはずなのだ。

run ?

「一緒に行こう、国龍……」

水龍は、傷の痛みも構わずに、体を起こして国龍の肩に抱きついた。

「……水龍？」

唇が触れ、重なった。

二人の、初めての、口づけ、であった。

それでも何故か、初めてではないような気がしていた。多分、まだ生まれる前からこうしていたのだ。同じ卵の中で眠っていた時から——そんな気が、した。

「もつとうまく逃げられる道を見つけなきゃね」

へへ、つと頭を掻き、ポツ、と頬を染めて、水龍が言った。

遅しさも子供の特権であっただろう。

「じゃあ、おまえはこれを食えっ。いっぱい走らなきゃならないんだからな」

国龍も、真っ赤な顔で、お粥を突き出す。

「え……ぼく、今日はもう……」

「食うんだっ」

半ば無理やり、水龍の口に中に、お粥を突っ込む。

結果、水龍は——。

「あーっ！ 汚ねーなっ。吐くんじゃねーよっ」

「だって……」

まだ胃が正常な働きをしていないのだ。

ありがた迷惑、というのも、子供にはありがちなことであった。せめて、水龍の胃の中に、あまり食べ物が入っていなかったことだけでも、救いであっただろう。

元気にしている国龍でさえ、頭から、顔から、腕から、体から、足から、どこも包帯とガーゼだらけなのだ。傷の数でいえば、先に

転んで動けなくなつてしまつた水龍よりも、暴れ回つた国龍の方が、多かつたに違いない。

「……ねエ、国龍」

「ん？」

「もし……ぼくたちにも」とーさん」がいたら、もつとお金持ちだつたかも知れないね」

「ふんつ。かーちゃんが娼婦なんだから、そんなもんいるわけないだろつ」

「だから、もし、だよ……」

母親が娼婦であることは、大人たちの会話の中から、幼い子供たちの耳にも、訊くまでもなく入つていたのだ。もちろん、最初から娼婦の意味を知つていた訳ではないが、娼婦の子に父親はいない、ということとは、案外早くから知つていた。

父親が欲しい、と思つたことがない、といえば嘘になるが、それでも、兄弟二人でいれば、不安などなかつたのだ。

父親と一緒に暮らせる代わりに、二人が離れ離れにならなくてはならない、と言われたら、二人とも間違ひなく、互いの存在を選び取つていただろつ。

「オレの毛布を使つてろよ。ゲロがついたの、洗つてくるからさ」
「うん」

毛布、と言えるほど暖かいものでなかつたにせよ、それは、この閉ざされた暗く狭い部屋の中で、唯一、互いの存在以外に、体を暖めてくれるものであつた。

もう夏も近いというのに、陽の差し込まない部屋は、一向に暖かさを含まなかつたのだ。この温暖な地にいてさえ。

一体、この部屋から笑いながら出て行つた人間は、何人いるのだろうか。この部屋で泣いた人間より少ないことは、確かであつた……。

途端に蒸し暑くなり始めた夏の一日、傷の癒えた二人を待っていたのは、客を取る、という仕事であつた。

否も応も、ない。

「もう九つなんだから、きっちり働いてもらわないとね」

という婆婆の言葉のままに、風呂場で洗われ、きれいな服を着せられた。

「水龍、おまえは〃初めての子がいい〃という客がいるから、そつちだよ。金もはずんでくれる。——国龍、おまえも初めてだ、と言うんだ。値段が違うからね。なあに、おとなしくしてりゃあ、判りやしない」

「い……いやだ……つ。今日からだ、なんて言わなかつたじゃないかつ。オレも水龍も——」

「言つたら、また逃げ出しただらう？」

「——」

「この土壇場で殴られて傷物にされちゃあ、たまらないからね。——さあ、この二人を連れておいき」

婆婆が言つと、図体のデカイ男たちが、二人を驚掴みにするようにして、抱え込んだ。

「やだあ——つ！ たすけて、国龍！」

「水龍！ 水龍を放せ！ 水龍に出来つこないんだつ。あんなことされたら、水龍が死んじゃうじゃないか！ 水龍は体が弱いんだつ」

先に連れて行かれる水龍を見て、国龍は男の腕の中で暴れ回つた。今日ばかりは男も殴れないと見えて、手足を押さえ付けるだけに留めている。

「おねがいだよ、^{ナイナイ}??！ 水龍はちよつとムリしただけで、熱を出すんだ。ムリし過ぎたら死ぬかも知れないんだ！」

「心配しなくても、客は丁寧に扱ってくれるさ」

「うそだ！ そんなのうそだ！」

「煩い子だね！ とつと連れてお行き」

「いやだあ——っ！ 水龍！ 水龍！」

それほど叫んだ日は、後にも先にもなかったに、違いない。国龍にしても、水龍にしても。

そして、どんなに叫んだところで、結果は何も変わらなかった。

run??

国龍が連れて行かれた部屋は、初めての時より、ずっと豪華な部屋であつた。ドアもあり、埃臭い匂いも漂つては、いない。ベッドも中国装飾のきれいなもので、右手にはシャワー・ルームさえ備えてあつた。

正面には、煙草を銜える背の高い男が立っていた。ここへ来る客には珍しく、形のいいダーク・スーツを身に纏う、まだ若い、三代半ばの男である。伶俐に整つた面貌をしている。

だが、男に抱え込まれ、暴れ回る国龍には、そんなことなど何も見えてはいなかつた。

「随分、気の強そうな子供だ」
煙草を銜える男が言つた。

「え、ええ、まあ……。こらっ、おとなしくしないかつ！」

「いやだあ——っ！ 水龍！ 水龍！」

口から零れるのは、自らの片割れの名前だけであつた。

「——水龍？」

客が、その言葉を聞いて、眉を寄せる。

「ええ、こいつの弟の名前で……。そっちの方も今日が初めてで……」

「なるほど。それでは暴れるのも無理はないな」

「すぐにおとなしくさせますから」

男はそう言い、

「静かにしないかつ。美国へ行きたいんだろ！」

と、少し声を落として、国龍の耳元で咎め立てる。

「いやだあ——っ！ 放せっ。放せつたら！ 水龍が死んじやうじやないか！」

「おまえが目の前に行っている男は、台湾や美国、この福建の地下では知られた男だ。——解るか？ この福建から美国へ船を出してい

る堂口（組織）の人間だ。彼を怒らせたなら、おまえは一生、美国行きの船には乗れなくなるぞ」

その言葉に、国龍はバタつかせていた手足を、ピタリ、と止めた。叫びを上げていた喉も閉ざし、目の前の客を、茫と見上げる。

「解るだろう？ この福州は、台湾から流れ込む資本で、繁栄が見込まれているんだ。彼らの動かすアングラ・マネーが北京を威圧し、地下資本が流れ込むのを黙認させている、と言ってもいい。彼らの力は、今に北京中央を越える。彼らがこの大陸を牛耳るんだ。おまえが美国へ行くための近道は、おとなしくしていることだ」

何という残酷な選択肢であつただろうか。わずか九つの子供に、本気でそんな選択をしろ、というのだろうか。弟を選ぶか、美国行きを選ぶか、どちらか一つにしろ、と。

男は、おとなしくなつた国龍を降ろし、部屋の外へと出て行つた。口火を切つたのは、客であつた。煙草を潰し、国龍の前へと歩み寄る。

国龍は、ただきつい眼差しで、立っていた。

「そういう眼をした男を知っている。大陸を出て、美国でのし上がった男だ。戦うために生まれて来たような男、と言つてもいい。野心に満ち溢れた、厳しい人間だ。——美国へ行きたいか？」

唐突とも言える問いかけであつた。

国龍は、黙つて男を見据えていた。

心が揺らがなかつた、と言えは嘘になる。

だが、大人に嘘をつかれることには慣れ過ぎていたのだ。

「フツ。気性も上等だな。あと足りないのは、頭だ。——私はラルフ・リー。少し考えれば、この名前の使い方も解るだろう。運がよければ、ロサンゼルス洛杉礮で逢える」

言葉と共に、煙草の匂いのする手が、国龍の頬に、スウ、と伸びた。

その手を受け入れてしまえば良かったのだろうか。

だが、国龍は、頬に触れようとするとその手に、思いつき口を開

いて噛み付いた。

「痛——っ！」

呻きが上がったが、それでも離すことはしなかった。

横つ面を打たれ、ドアに叩きつけられるまで、ただ懸命に噛み付いていた。

強かに背を打ち、頭も少し茫としていたが、それでも、また噛み付いてやる積もりで、いた。

だが——。

「子供を打ったのは初めてだが……あまり気分のいいものではないな。——立てるか？」

何故、その男はそんな顔をするのだろうか。

何故、その男はそんな言葉をかけるのだろうか。

国龍は、ドアに叩きつけられた時の痛みも忘れて、その男を見上げていた。

それでも、大人を信じることは出来なかった。

「さわるなっ！」

バシ——っ、と男の手を叩き落とし、ドアを開けて外に飛び出す。

廊下の先には、見張りの男が立っていた。

当然、部屋から飛び出した国龍の姿も見咎められ、すぐに行く手を塞がれた。

背後から声がしたのは、その時だった。

run??

「おい、手当をしてくれ。怪我をした」

それは、ラルフ・リーと名乗った男の言葉であつた。国龍に噛み付かれた手を持ち上げ、行く手を塞ぐ男に示している。

「こ、これは李先生（ミスター）……。このガキが何か——」

「手当をしてくれ、と言つたんだ。私の怪我より、そんな子供の方が大切なのか？」

「い、いえ、そんなことは——つ。すぐに手当を——」

男が薬箱を取りに、翻る。それを見て国龍は、ラルフ・リーと名乗った男の方を、振り返った。

どう見ても、見張りの男を追い払ってくれた、としか思えない状況だつたのだ。たとえ、まだ頭の足りない国龍でも、それくらいのことには察し得た。

ラルフと名乗った男は、もう関心もないように、部屋の中へと引込んで行つた。それは、国龍が足を踏み出す切っ掛けでも、あつた。

国龍は、前を向き直つて、駆け出した。

その耳に、ラルフの呟きは、届かなかつた。

「美国行きよりも、弟の方が大切か……」

部屋に飛び込み、水龍を弄ぶ男にも噛み付き、大暴れをした国龍は、その日、また、男たちに死ぬほど殴られるハメになっていた。

水龍は、といえば、初めて客を取らされたショックに、半ば放心状態になつていたものの、その国龍の姿を前にして、ショックに浸っている間もなく、何もかも忘れたように、懸命に国龍の看病を続けていた。やるべきことがあつたために、狂気に取り憑かれること

もなかったのだろう。それは、何よりの救いであつた。

「おかゆは？ おかゆ、食べれる、国龍？」

包帯とガーゼでぐるぐる巻きにされた国龍に、欠けた茶碗を示して、問いかける。

「……あの時の仕返しを……するつもりだろう？」

「え？」

「今、食べたなら……吐く……」

あれほど殴られた、というのに、国龍は逞しい言葉を口にした。

——いや、吐くという言葉が正しいかどうかは疑問の残るところだが、体の傷に精神まで犯されまいとするその姿は、やはり、逞しいとしか言えないものであつただろう。

そして、涙が零れ落ちそうになるほどに、痛ましい……。

「どうしたら……頭よくなれる……のかな……」

「え？」

「まだ……頭にシラミ……蛆いてるかな……」

「なにかあつたの、国龍？ 頭、ヘンだよ」

「やっぱり……ヘンかな……」

「うん」

「オレ……頭よくなりたいな……」

熱に茫とする頭で、そんなことを呟き、国龍はいつの間にか眠りに導かれていた。

耳元では、心地よい水龍の声だけが聞こえていた……。

「——ったく。何て子だろうね。客に怪我はさせるは、反省はしないは、おまけに、またこんなに殴られちまつて——。顔に傷がついたら、客も取れないんだよ」

今日も婆婆は苦々しい顔で、干からびた小言を吐き出した。

「国龍が悪いんじゃないんだっ。国龍はぼくを助けようとして——。

だから、国龍を怒らないで、^{ナイナイ}??？」

水龍は、毛布に横たわる国龍の前に立ち塞がり、気丈な言葉で両手を広げた。恐らく、初めて国龍を守る、という立場に立ったことが、そんな健気な言葉を口に出させていたのだろう。これ以上、国龍に近づかせまい、とするように、小さな体で踏ん張っている。

「国龍は悪くない、だって？ ハッ！ ロクに働けもしないクセに、偉そうなことを言うんじゃないよ」

「働くから——。ばく、国龍の分まで働くから。だから、国龍に何もしないで」

何故、わずか九つの子供が、これほどまでに強くななくてはならなかったのだろうか。

もつと甘えて育ってもいい年だったのではないだろうか。

彼らが甘えたところで、誰も咎めはしなかっただろう。

ここで泣いてしまっても、誰もみつともないとは思わなかっただろう。

戦っているのだ。決してきれいごとだけでは済まない戦争を、わずか九つの子供が始めている。

もちろん、それが正しいとは、言わない。傍から見れば、意味のない無謀な戦争であつたかも、知れない。

それでも——それでも、彼らがそうして大人たちを睨みつけて生きていることを、馬鹿馬鹿しい、と一笑に付す人間にはなりたくない、と思わなかっただろうか……。

「いい心掛けだね。明日からはおとなしく客を取ることだ」

婆婆はそう言って、部屋の外へと消えて行った。

薄汚れた布だけが、その名残を留めるように、揺れている。

国龍が口を開いたのは、その揺れが止まってからのことであつた。

run??

「今夜だ……」

「え？ 目が醒めたの、国龍？」

不意のことに、水龍は、ちょこん、と座って、国龍の顔をのぞき込んだ。

「今夜……逃げるんだ……。ナイナイも男たちも……今日はきっと、油断してる……」

国龍の言葉は、確かにその通りであつただろう。怪我をして動けない国龍と、客を取ることに素直にうなずいた水龍が、今夜、逃げる出すとは誰も思ってもいないはずなのだ。
だが――。

「ムリだよ。国龍、動けないじゃないか」
水龍は言つた。

いくら婆婆や男たちが油断していようと、動けない国龍と、体の弱い水龍が、逃げ切れるはずもないのだ。

「逃げるのは、おまえだ……」

「え？」

「おまえが逃げるんだ、水龍……」

国龍は、柔らかい眼差しで、水龍を見上げた。

頭を使うことを覚えた、最初の言葉であつたかも、知れない。

「……。いやだ。国龍は熱があつて、頭がヘンになつてるんだ。めつたに熱なんか出さないから、よけいに――」

「聞け。――ラルフ……ルオシャンジ洛杉礮のラルフ・リー……その名前を出せば、美国行きの船に乗せてくれる堂口が、どこかにある……。港で訊けば判るかもしれない……。先に美国に行くんだ、水龍……。オレは、一人ならいつだって逃げ出せる……」

「……ぼくがジャマ？」

同じ卵から産まれた半身を、どうして邪魔だと思ふことが出来る

だろうか。

「オレ……今、頭にシラミ蛆いてないと思う……。二人がいつぺんに逃げたら、すぐに見つかるけど……。オレがここにいれば、あいつら、すぐにおまえを探そうとはしない……。オレは後から行くから……。今日を逃したら、もう逃げられない……。」

子供の成長がこれほど早いものであると知る人間が、果たして、何人いただろうか。昨年の秋まで無邪気なだけであつた幼子が、数カ月後の夏には、もうこれほどまでに周りを見る眼を持っているのだ。もちろん、早く成長しなければならぬ状況であつたことも確かだろう。周りの人間が、彼らをいつまでも子供でいさせてくれなかつたこともあつただろう。それでも、国龍の成長の早さは、本来持っていた能力の覚醒であつた、とは言えないだろうか。

「泣くなよ、水龍……」

「国龍だつて泣いてるじゃないか……」

「おまえが泣くからだろ」

二人に取つては、これが初めての別れであつた。生まれる前からずっと一緒にいて、同じものだけを見て育つて来たのだ。

そして、今、初めて別々のものを見ようとしている。

いつかのように、二人はまた、唇を重ねた。

「……ぼくがちゃんと逃げられたら、国龍、安心して逃げられるよね？」

「ああ……。ラルフ・リーだ。忘れるなよ」

「うん……」

或いは、離れるべきではなかつたのかも、知れない。何があつても離れてはいけなかつたのかも、知れない。

それでも二人には、そうすることしか出来なかつたのだ。美国がどれほど遠い場所であるのかも、知らなかつた、のだから。

心が引き裂かれるような痛みを、感じていた。

国龍も水龍も、体の半分を失うような思いだつた。

涙は、何度拭つても、零れ落ちた。

「離れたく……ない……」

水龍の足も、なかなか動き出そうとはしなかった。

「美国で……いっしょに暮らそう……。こんなところで暮らすのは……もうイヤだ……」

追い立てなくてはならない国龍も、辛かった。

せめて、今夜一晩だけでも、互いの温もりを感じながら眠っていたかったのだ。国龍も、水龍も……。たとえそれが、屈辱に塗れた生活に繋がるものであっても。今日を逃せば、もう逃げる機会はなくなってしまうかも知れない、と解っていても。

「オレ……畑から野菜、盗んだけど……もう、それをゆるしてもらえくらいのこと……したよな……」

「国龍……」

「だから、神さまもきつと、味方してくれる……。そう思うだろ、水龍？」

「……うん」

「熱出すなよ……」

「うん……」

「じゃあな」

国龍はそれだけを言って、目を瞑った。多分、そうしなければ、水龍も部屋から出て行くことが出来なかっただろう。そして、国龍も、水龍を引き留めてしまいかも、知れなかった。

水龍は、なかなか部屋から出て行かなかった。国龍がまた声をかけてくれるかも知れない、引き留めてくれるかも知れない、と期待を待っていたのだ。

だが、国龍は目を開かず、水龍もしばらくして、立ち上がった。何度も国龍の姿を振り返り、それからようやく、部屋を出た。

お互い、喉が張り裂けるほどに、泣き叫んでしまいたい別れであった。

男たちにどれほど殴られても、こんな気分になりはしなかったのだ。

「水……龍……」

その夜、水龍が捕まった、という話は、国龍の耳には届かなかった。

次の日、国龍は、婆婆や男たちから水龍の行方を問い詰められたが、決して口を開くことはしなかった。

婆婆や男たちも、国龍がここにいれば、水龍もすぐに戻って来ると思っていたのか、殴りつけてまで訊くことはしなかった。もっとも、すでに殴られてボロボロになっている国龍を殴っても、意味がなかったせいもあるだろう。

そして、次の日も、その次の日も、そのまた次の日も、水龍がこの置屋へ戻って来ることは、なかった……。

run??

「——たく。あの気の弱い子が一人で逃げ出すなんてね。まだちつとも稼いでないっていうのに。——国龍、おまえは逃がしやしないよ。あの子の分まで稼いでもらわなきゃならないからね」

熱が引き、やっと体を起こせるようになった国龍を前に、婆婆はこうつくな顔で、そう言った。

「オレは……水龍さえ逃げてくれれば、それでよかったんだ」

「ハッ！ どうだか。そう言った夜に逃げ出されちゃ、困るからね。おまえは鍵のある部屋に移してもらうよ、国龍」

「——」

「逃げる気がないんなら、一向に構わないだろ？」

まだ大人の狡賢さに対抗できるほどの力は持っていなかったのだ、国龍は。

多分、婆婆は、国龍のそんな心の内も、全て見透かしていたのだろう。

国龍は、その日の内に、鍵のある部屋に移された。窓もなければ、逃げ出せそうな隙間など何もない殺風景な空間である。多少、前の部屋より広さがあるとはいえ、一人になった今、それは快適なものでも何でもなかった。

二人なら、たとえ鍵のある部屋に移されても、何の不安にもならなかったはずなのだ。

だが、今は——。

この部屋からどうやって逃げ出せ、というのだろうか。

あの男なら——ラルフ・リーなら、その答えを知っていたのだろうか。

「水龍……オレ、逃げられないかも知んない……」

心細さと口惜しさの入り交じった呟き、であった。

鍵はどうやって外れず、ドアはどんなにぶつかっても壊れず、

話相手もいなくなり、逃げる算段も思いつかず、また、逃げようとしては死ぬほど殴られ……そんな中、国龍が無気力になって行くのにも、そう時間は掛からなかった。

口を開くのも、客に体を貰かれた時の悲鳴だけに、なっていた。そして、いつしかそれも、忘れていた。

最初から、幼い子供が海を越えて美国に行く、など、無謀なことではなかったのだ。四川から福建に辿り着けたことすら運が良く普通ならどこかでたれ死んでいたはずなのだ。——いや、死んでいた方が良かったのかも、知れない。その置屋で国龍が体中に塗りとくられた屈辱と痛みは、そう思わせるに充分なものであった。

そして、逃げ出したはずの水龍の行方も、一向に国龍の耳に入ることとは、なかった。体の弱かった水龍が、無事、船に乗ることが出来たのかも、長い海の上での生活に耐えられたのかも、閉じ込められたままの国龍には、知る由も、なかった。

そんな中、国龍が死ぬことを考えずに生きていたのも、素直に客を取っていたのも、全て、置屋に訪れる客から、水龍の噂を聞き出すためであったのだ。そのために客を取り、男たちの監視の中、屈辱に耐えて生きて来た。水龍だけが、国龍の心の拠り処だったのだ。

だが、一年経っても、二年経っても、水龍の確かな噂は集まらず、水龍自身からの連絡も、ただの一度も入らなかった。

そして、三年——。

一九八九年、夏。

世界中を騒がせた六月四日の天安門事件の痛手もまだ生々しい中、多くの民主運動家が海外へと脱出を図っていた頃、それに合わせて海外と本土を結ぶ人間の動きも活発になっていた。海外華僑からの手紙や物資を本土へ運ぶ、水客スイク、と呼ばれる人間である。彼らは、古くからその呼び名で呼ばれていたが、今では単なる運び屋としてだけではなく、その人脈と情報を利用して、大金を手に入れている者も珍しくはないようになっていた。

「よう、国龍。今日は確かな情報を持って来てやったぜ」

客の待つ部屋に入ると、真っ黒に日焼けしたその手の男が、欠けた歯を見せて、ニヤリ、と笑った。

「……期待させといて、また何も判らなかった、ってんなら、サービスはしないぜ。寝てる間にさつさとやって帰れよ」

十二歳になった国龍は、冷めた眼差しで言葉を返し、ベッドにゴロリと横になった。

「相変わらず、冷たい奴だな。ガキってえのは、もっと可愛いもんだぜ。——まあ、そこがいいんだがな」

誰が可愛げのないガキにしたと言っのだろうか。欲に膨れた大人たちではないのか。

run??

「……さつさと言えよ。オレ、毎日、窓のない蒸し暑い部屋に寝かされてるから、寝不足で眠たいんだ。相変わらず、ドアの鍵も開けてくれないしさ」

「ああ、解ってるさ。おまえの頼みなら何だって聞いてやるさ。おまえほど男をそそる人間はいやしない」

「……」

あれから、国龍が覚えたことといえば、自らの体を使って男を利用し、そこから情報を聞き出すことであつた。自らの美しい容貌を認識し、それを最大限に使うことを覚えたのだ。

もちろん、覚えたことより、忘れたことの方が多かつた。笑い方も、泣き方も、その一つである。

男の指が下肢の狭間を弄るのを見て、国龍は黙って目を瞑つた。

「三年前の密航船の記事を、美国で集めていて、な」
男が言つた。

「何しろ、向こうに渡つた奴でも、英語が出来る人間なんか、そうそついやしないから、訊いて回つたところで、目ばしい話なんか出て来やしない」

「……それで？」

「向こうの沿岸警備艇に見つからずに上陸できた運の良い船に、おまえの弟が乗っていなかったことはこの前に話した通りだが、警備艇に見つかつて、上陸を拒否された密航船の中に、おまえの弟が乗っていたらしいと言ふんだ」

「らしい、か。結構なことだな。そんな話を持って来る奴はごまんというさ。あんただけじゃない」

国龍は、もう何の期待も持たない口調で、ただ無気力に吐き捨てた。

実際、水龍らしき子供が船に乗っていた、という話は、山ほどあ

つたのだ。最初は国龍も期待し、情報を持って来てくれた男に奉仕し、もっと詳しいことを調べて来てほしい、と頼んだが、結局、それ以上のことは、いつまで経ってもあやふやなままであった。

その内、国龍も気がついたのだ。男たちは、国龍に奉仕させるために、調べてもいないことを、さもそれらしく言ってみせていただけであつたのだと――。

「今度は本当さ。カリフォルニア半島沖を船行中に、美国沿岸警備艇に見つかった船があるんだ。中国人六〇〇人を乗せた三隻の船で、出港元はこの福建――。密航者はチャーター機で強制送還されたんだが、その船に乗っていた一人が、おまえの弟のことを覚えていたんだよ」

「――で、水龍は本土へ強制送還されて、その後の行方は判らないつてか？ 毎回、懲りもせず、よくそんな話を持って来るもんだな。少しは証拠でも持って来たらどうだ？ そうしたらオレも信じ――」

「真面目に聞けよ」

「……フンっ」

真面目に聞いていれば、今頃、絶望の最中にいたに違いない。

「おまえの弟は、あまり丈夫な体じゃなかっただろう？ 船の中でも、容体のいい日なんか、ほとんどなかったそうだ。まあ、何百人もの人間が詰め込まれた、汚い船の中だからな。病気や疲労で死んで逝く人間は何人もいた。体が丈夫な奴でも、生きていられるかどうか判らない旅だからな」

「……何が言いたい？」

国龍は、男の言葉をきつく見据えた。

「もう弟のことは忘れる。おれがおまえの身請けをして、ここから出してやるから――」

「触るなよ、ゲス！」

国龍は、男の手を振り払った。

「オレの身請け？ ハッ！ あんたのものになるのなんかごめんだ、

と言ったはずだ」

「国龍——」

「帰れよ！ 金なら返してやるさ。オレの客はあんただけじゃないんだ」

「……。いい加減、現実を見たらどうだ、国龍。もう三年だ。その間、一度も連絡が入らないなんて、おかしいと思わないのか？ 普通なら、美国で働いて、おまえの元に金を送って来ているはずだ。——そうだろ？ おまえの弟は死んだんだよ。美国へ着く前に船の中で死んで、そのまま海に捨てられたんだ。だから、美国でも情報が手に入らな——」

「帰れ！ 帰れよ！ あんたの言うことなんか信じるもんかつ！ さっさと帰れよ！」

どの男たちも、似たような話を持って来たのだ。

国龍の身請けをしたいがための偽り話だと——。確証など何もない戯言だと——。そう思うことで、国龍はその現実を受け入れまいとして来た。

だが、もう三年なのだ。

「帰れ……よ……。帰ってくれよ……。オレを抱きたいんなら……抱かせてやるよ……。だから……さっさと抱いて帰れよ……」

離れなければ、よかったのだ。

手放してはならない半身だったのだ。

だが、あのまま水龍が男たちの餌食にされるのを、黙って見ていることが出来た、というのだろうか。

その生活に、水龍が耐えられた、というのだろうか。

どちらの選択が正しかったのか、など、きっと誰にも判りはしない。どっちを選んでも、後悔しかなかったかも知れないのだ。

『ぼくがちゃんと逃げられたら、国龍も安心して逃げられるよね』

まだ、やっとなつたのだ……。

run ??

「???、オレの借金、あとどれくらい残ってんだよ」
ナイナイ

客を取り始めて四年近く、今年、十三歳になろうとする国龍は、ソロバンを弾く婆婆を前に、ぞんざいな口調で問いかけた。いつ死んでもおかしくない老齡の婆婆であるにも拘わらず、全く死ぬ氣配もなく、日々、金勘定に精を出しているのだ。

一九九〇年、春――。

「そうだねえ……。おまえはよく稼いでくれるが、客とケンカをしては治療費ばかり嵩かさむからねえ。今年に入ってからだけでも、客にいくら払ったか――」

「あとどれくらいだ、って訊いてるんだよ」

のらりくらりと、いつも曖昧な言葉で逃げるのだ、婆婆は。

「なあに。おまえならすぐに返せる金額さ。客に怪我さえさせなければね」

「……」

「美国へ行くための金も稼ぎたいんだろ？ その器量だ。いくらでも稼げる。おまえほどの器量を持った人間は、どこにもいやしくないからね」

「……水龍とオレは同じ顔だ」

「ん？ ああ、おまえの弟かい。可哀想にねえ。ずっとここにいれば良かったものを、逃げ出したりするから行方知れずになるんだ」

「……。もうとくにオレの借金の返済は終わってるはずだ。オレはそれくらいは充分に稼いでる。客に払った治療費も含めて――。オレだって、いつまでも計算が出来ないバカなガキのままじゃないんだ」

国龍は、威圧感すら備える眼差しで、婆婆を見据えた。

大人に騙されることには慣れているとはいえ、もう何の反抗も出来ない小さな子供ではないのだ。

だが――。

「偉そうな口を叩くんじやないよ。誰が今日まで面倒をみて、大きくしてやったと思ってるんだい。あたしがいなけりゃ、おまえだつてのたれ死んでたガキなんだ」

「――で、一生、そうやってオレから絞り取るのか？」

「計算よりも先に、口の利き方を覚えな。――さあ、さつさと部屋へお行き。客が待つてるんだ」

「……」

もう一生、ここから出ることは出来ないのだろうか。

何人もの男たちが見張りにつく中、国龍が逃げ出すことは不可能なのだろうか。

だが、逃げ出してどこへ行こうというのだ。水龍の手掛かりさえ、掴めてはいないというのに……。

「ヘエ。今日は上等な客かい？ 借金が終わらないのが不思議なくらいだな」

ドアのついた、いい部屋の前に連れて来られ、国龍は、ピッタリと張り付く見張りの男たちに、皮肉を向けた。

「借金を済ませたければ、二度と客に手を上げないことだ」

「ハッ！ 一回殴っただけで、三〇発は殴り返されてるさ。あんたらにもな」

投げ付けるように言葉を放ち、乱暴にドアを開けて、中に入る。

ドアを閉じる凄まじい音も、今の心境を表すものであったかも、知れない。

小ぎれいに整えられた部屋の中には、サングラスを掛けた長身の男が立っていた。身につけているダーク・スーツも、いつもの客のものとはケタが違う。三十代の後半だろうか。そこいらのチンピラには持ち得ない、強かな雰囲気を用意する男であった。

「相変わらず、いい気性だな。もうとつくに廃人同然になっているかと思っていたが」

「……え？」

「私を忘れたのか、坊主？」

煙草を挟む指が、サングラスを外した。

「あんた……」

忘れるはずもない顔であつた。一度、国龍を見張りの手から逃がしてくれ、水龍の元へ行くのを助けてくれた男だ。——そう。名前も覚えている。

ラルフ・リー。

煙草の匂いも、幼い日に噛み付いた時と同じであつた。

「水龍、という子供が私を頼って船に乗った、と聞いたんだが、一向に姿を見せなくてね。私も色々と手を使って捜し回ってみたんだが、結局、見つからなかった」

ラルフは、外したサングラスを胸のポケットに仕舞いながら、要点だけを簡単に告げた。多分、簡単にしか告げようのない言葉でもあつたのだろう。

「水龍は……生きてる。死んでなんかいない」

「なら、君はここで何をしている？」

「え……？」

run??

「足りないのは頭だ、と教えてやっただろう?」

「……。ずっと、鍵のついた窓のない部屋に閉じ込められていたんだ。部屋から出られるのは、こうして客を取る時だけで……」

「客は、君を逃がしてくれようとはしなかったか?」

「身請けをしたがる客は何人もいたさ。それを利用してここから出ることも出来た。——だけど、結局、所有者が替わるだけなんだ。身請けをしてもらっても、同じように閉じ込められる」

「なるほど」

「たったそれだけの言葉であつた。納得しているのか、馬鹿にしているのかさえ、判らないような。」

そして、国龍には、そんな男を前にして、敵意すら持っていない自分が不思議だつた。以前に助けてもらったことがあるとはいえ、国龍を助けようとしてくれた男など、何人もいたのだ。

「あんた……誰なんだよ?」

戸惑いのままに、国龍は訊いた。

「ただの客、という応えでは納得できないか?」

煙草の煙が、青く、昇る。

「……抱きたいのなら、さっさと抱けよ。ゲスな奴らはいつもそうだ。オレに舐めさせたいがために、そうやってオレの知りたい言葉をもったいつける。オレが舐めてやって、突っ込ませてやって、やっと口を開くのさ」

「……。そうだったな。悪かった」

「え……」

そんな言葉が返つて来るなど、誰が思っていただろうか。

「オレ、別に謝ってもらいたかつた訳じゃ……。客のあんたがオレに正直に話さなきゃならない理由なんて、どこにも……」

国龍は、語気を落として、口ごもつた。

クツクツ、と楽しげな笑みが、零れ落ちる。

それも何だか、不思議な気がした。その男が笑うなど、思いもしないことだったのだ。しかも、そんな優しげな表情で。

「あんた……何でオレに名前を覚えてくれたんだよ？ 何で水龍のことを捜し回ってくれたんだ？ 何でまたオレに会いに来たんだ？」
胸に渦巻く疑問、であった。

「……。今、君が訊きたいことは、そんなことではないはずだろう？」

「え……？」

「他に訊きたいことはないのか？ 何よりも先に知りたいことは？」
新しい煙草に火を点けながらの、問いかけであった。

何よりも先に知りたいこと……。

「水龍は……水龍がどこにいるのか知りたい。だけど、オレはあんたほど頭がよくないんだ。頭のいいあんたに探せなかったのに、オレにどうやって探すことが出来るんだ？」

「手を貸してやろう」

あっさりとした口調で、ラルフは言った。

「美国でのし上がれ。君の顔が全米で知られるようになれば、君の弟が君を見つけれ。そうでなくとも、誰かが君と同じ顔をした弟の存在に気づいてくれる。そのための手段なら、いくらでもある。世界中を騒がせる犯罪者になるもよし、その容姿を利用するもよし――。一緒に来るか？」

コクリ、とうなずくまでに、そう時間が掛かる問いかけでは、なかった。

その日の内に、国龍はラルフに身請けをされて、置屋を出た。ラルフが婆婆にいくら払ったのかは教えてもらえなかったが、相当な金額であったことは、間違いなかった……。

run??

光の海――。

確かに海と言えるものだったのだ。上空から見下ろすロサンゼルスは、飛行機速度さえ無視しているかのように、ほとんど位置を変えずに、そこにあつた。美しい、とか、凄い、とか思う前に、飛行機が上空で停止してしまったのではないか、という錯覚さえ、覚えていた。

「あれ……何なんだ？」

始めて目にする大都会に、国龍は呆然と呟いた。飛行機に乗るのも初めてなら、そんな光の塊を見るのも始めてだったのだ。

ここへ至るまでの恥は、台湾のホテルに泊まった時から含めて、一通り何でも使い果たしていたため、そんな言葉しか出て来なかったのかも、知れない。

「あれがLA――洛杉礐だ」

隣に座る、ラルフが言った。

「街が……光ってる……」

その言葉以上に、的確な言葉があつただろうか。都市の中心部だけが輝いている訳ではなく、恐らく何十キロにも渡つて、光の海が続いているのだ。

「ここ、LAは、アメリカの中でも特種な街だ。普通、都市には中心部というものがあつて、そこに企業や観光地、主要機関のほとんどが集中しているが、ここ、LAでは、何十キロにも渡つて、それらが千々に散らばっている。――たとえば、福州なら数キロ走れば農村部に行き当たるが、LAは数十キロ走つても、まだ市内だ」

「……」

言葉は何も、出て来なかった。とんでもない街に来てしまったのだ、と思っていた。初めて履かされた革靴の違和感さえ忘れてしまふような、そんな圧倒的な雰囲気だったのだ。

鼓動が高鳴り、足がガクガクと震えていた。

飛行機が揺れた時は叫んでしまったが、今はそんな声すら出て来なかった。

「君がしなくてはならないことは、まず言葉だ」

「言葉？ オレ、英語なら少し——」

「君の英語など通用しない。それに、オレではなく、ぼくだ。汚い言葉や暴力で相手を威嚇しようとする人間など、所詮、取るに足らないクズだ。己に力があれば、言葉で相手を威嚇する必要もない。ぼくか、私。それが最低限の言葉遣いだ」

「……何だつてしてやるよ。それで水龍が見つかるのなら」

飛行機が、光の海の中へと着陸する。
ランディング

ここから全てが始まるのだ。

空港から乗った黒塗りの高級車は、パーム・ツリーの並木を横目に、目を瞠るような大邸宅へと滑り込んだ。

このホテルに泊まるのか、と国龍が訊いたことは、ここでは触れないことにする。そんな大ボケを一々書いていては、話が前に進まなくなる。

だが、まるでお城だな、と言ったことは、その邸宅を表す言葉として、書き留めて置いてもいいだろう。

そこは、ラルフの自宅であった。

そして、それを聞いた国龍がどんな顔をしたかは、言うまでもない。また、頭に虱が蛆きかけていたのだ。

「ここが城？ ハッ。この街では、これを城とは呼ばないさ」

もっとと凄い豪邸があるのだということも、いくつも豪邸を持っている人間がいるのだ、ということも、国龍はその時、初めて、知った。

それから色々なことを覚え——覚えさせられ、知識と言わず、マナーと言わず、休む暇など全く、なかった。

「私のことはラルフでいい。中国名は使っていない。そして、中国語も、屋敷を一步出れば、通用しない。——君にも覚えてもらい易

い名前がいるな。郷に入っては郷に従え、という奴だ」

話は一方的に続くことが多かった。

「アレックスがいい。それなら、皆すぐに覚えるだろう」

「何かその名前に意味があるのか？」

「以前に飼っていた犬の名前だ。出来のいい犬で、使用人も皆、可愛がっていた。君も、その犬くらいに賢くなってくればいいんだが」

「ムッ」

「気に入らないか？」

「当然だろう」

「アレキサンダー大王と同じ名前だぞ」

「そんな奴、知らない」

「まあ、私も直接は知らないが……。話に出てくるほど偉大な人物だったのか、ただの暴君だったのか――」

「なおさら、イヤだ」

「なら、ロンにしておけ。――姓は韋^{ウェイ}だったな？　ロン・ウェイでいい。中国名はなかなか覚えてもらえないが、それならすぐに覚えてもらえる」

「龍^{リウ}……」

「君の弟も気がつくだろう」

真面目なのか、不真面目なのか、人を食ったようなラルフの言葉と生活は、国龍に取って、以外にも早く馴染めるものであった。

run??

だが、ラルフが屋敷にいる時間は極端に短く——仕事を持ってい
るのだから当然のことなのだが、国龍の教育は、十人を越える家庭
教師と、屋敷の使用人で賄われることになった。

ラルフが何の仕事をしているのかは、解らない。以前に、堂口の
要人である、というような話を置屋の男から聞かされたことがあつ
たが、ただのマフィアの構成員として片付けるには、立派な知識人
である、という印象が強過ぎたのだ。

もちろん、それを使用人に訊いてみたことも、ある。

「旦那様ですか？ 旦那様は、ミスター・黄^{ホワン}の秘書をなさっておりますよ」

と、丸々と太ったメイドは、応えてくれた。

「ミスター・黄？ 誰、それ？」

「ご存じないんですか？ このロサンゼルス^{ロサンゼルス}のファー・イースト・
ナショナル銀行の総裁で、大統領のブレーンをなさっていたことも
ある、黄中元様ですよ」
ホワンチュンコアン

何だか、肩書だけでも物凄い人物なのだ、ということは、国龍に
も解った。大統領といえば、このアメリカで一番、偉い人であり、
その人のブレーンとして働いていただけでなく、自分の銀行まで持
っている、というのだ。

国龍はまだ銀行を利用したことはないが、そこが大変な金額のお
金動く場所である、ということは知っていた。

このアメリカで、そんな地位と金を持っているなど、まさに、海
を越えてアメリカに渡った中国人の夢、最高のサクセス・ストーリ
ではないか。

そして、そんな人物の秘書として働いているラルフに、国龍の相
手をしている時間など微塵もないことは、容易に知り得た。

況してや、水龍の搜索に費やす時間など、全くと言っていいほど

なかっただろう。そんな中、四年間もかけて水龍の行方を捜し回ってくれ（見つからなかったとはいえ）、福建の国龍の元にまで知らせに来てくれたのだ。

だが、それは何故なのだろうか。

何故、ラルフはそれほどまでに、国龍や水龍のことを気に掛けていてくれたのだろうか。

「やっぱり、オレの顔がいいからかな」

と、虱の蛆いた頭で受け流せるほど、単純な疑問では、なかった。

「ラルフは、オレ——ぼくのこと、何か言ってた？」

その問いかけに、

「え、ええ、まあ……」

丸々と太ったメイドは、言いにくそうに、口ごもった。

国龍が問い詰めると、

「あ、あの、気が遠くなるほどの馬鹿な田舎者だから、理解できるまで何度でも、何でも、教えてやってくれ、と……」

いかにもラルフが言いそうな言葉である。

「教えてくれて、ありがとうっ」

どうやら完全に弄ばれているらしい。

国龍は爆発寸前にまで、憤慨した。否定できないことが、尚更、腹立たしい状況である。

「旦那様は、まだお若いですけど、とても立派な方ですよ。お忙しくて、家庭もお持ちになっ……ていませんけど……。その旦那様が、こんなに愛らしい坊っちゃんをお連れになるなんて……。ロン坊っちゃんがいっしょにいれば、旦那様もきっと、ゆったりとした時間をお持ちになるようになりますよ」

「……あいつがゆったりとした時間を持たないのは、忙しいからじゃないくて、性格だと思う」

国龍は、ボソリ、と呟いた。

「は？」

「あ、いや、別にな」

面倒をみてもらっている手前、悪口は言えない。いくらラルフが他人と好意的に付き合って、週末にはパーティを開くような人間でなくとも、悪口を言ってしまうほど、悪い人間でもない。と、国龍は一応、思っている。

時々、後ろからゲンコツで殴りたくなる時もあるが、それは軽々と躲かれそうなので、未だ実行したことは、ない。ちなみに、未遂はある。

だから、わりといい子で過ごしていたのだ。国龍にしてみれば。

run??

「ラルフは？ 休日なのに、また仕事？」

「ええ。今日も遅くなると言っておいででしたよ」

「そう……」

メイドの言葉に、国龍は落胆を表すように、肩を落とした。

「……明日は早くお帰りになるよう、私からも頼んで差し上げますよ」

「……」

「ロン坊っちゃま？」

きつと、これほど切なげな国龍の表情を、メイドは見たことがなかっただろう。

だが、ラルフは見たことがあつたかも、知れない。台湾のホテルで、ラルフがシャワーを浴びている間に、国龍がラルフのサングラスを――付け加えておけば、何十万もするサングラスを、弄って壊してしまった時、国龍は同じような表情をしていたのだ。

それと同じレベルになつてしまうことが、哀しい。

「大丈夫でございますよ。旦那様もロン坊っちゃまのお相手が出来ないことは、心苦しく思つていらつしやるんですから。少しくらいの無理は聞いてくださいますとも」

「……ホントに？」

「ええ、本当ですとも。――旦那様に何かご相談ごとでも？」

コクリ、とうなずき、国龍は手に持つ万年筆を持ち上げた。

「勉強してたら、インクが出なくなつて……」

「まあまあ、万年筆のインクくらいでしたら、私でもご用意して差し上げられますよ」

「違つんだ。インクが出なくなつて、思いつきり振つたら、インクが部屋に飛び散つて……。前に聞いたんだけど、部屋にある絨毯つて、ペルシャ絨毯だっけ？ ぼく、値段まで聞いてなかったから、

よく解らないんだけど……高い？」

「……」

メイドが絶句したことは、言うまでもない。

そして、仕事から戻って来たラルフが絶句したことも……。

「あのお……」

「今度は何を壊したんだ？」

国龍の呼びかけに、ピクリ、とこめかみを引きつらせて、ラルフは言った。

国龍による被害総額は、すでに目眩を起こしそうなほどになっているのだ。

ラルフが国龍の方を振り返ることが出来なかったのも、仕方ないことであっただろう。控えめな国龍の口調は、次の言葉を容易に察し得させたのだ。

「さつき、庭の木に登ってたら——」

「うっかり足を滑らせて、庭にある彫刻を壊した、ってか？ だいたい、何だって木に登ったりするんだ？ あの彫刻がいくらしたと思っっている？」

「……彫刻は壊してない」

「どうやら、予想最高被害額は免れたらしい。」

「なら、何を壊した？」

「木から落ちて……足がすごく痛いんだけど、骨が折れてるんじゃないかなあ、と思って……」

「この馬鹿っ！ 何でそれを早く言わないんだ！」

「言おうとしたら——」

「おい！ 私の車を玄関へ回しておけ！ 国龍を病院へ連れて行く」

破壊費だけでなく、医療費も人並み以上に、かかっていた……。

run ???

「まあ、ロン坊っちゃま、何て痛々しい……。骨折だなんて、お可哀想に」

手の掛かる子供ほど、女には可愛いものらしい。丸々と太ったメイドは、病院から戻って来た国龍を見て、これ以上はないほどに、労りを見せた。

それは、実害を受けているラルフとの違いでもあっただろう。

「私は医者に儲けさせるために、君をここに置いている訳じゃないんだぞ」

と、煙草を抜いて、憮然と言う。

「……ごめん」

「旦那様っ！　ロン坊っちゃまがお可哀想でございますよ。こんな小さな子が怪我をして、痛い思いをしていらっしやる時に」

何故か、ラルフは責められる立場にあるらしい。

手の掛からない大人は、女に取って、世話をする楽しみがないのだろう。

「——理由次第では、可哀想だと認めてやろう。何故、木に登った？」

「ラルフの……」

「ん？」

「ラルフの誕生日だから、庭中の木に飾りをつけようと思って……」その言葉に、メイドは早くも、うるうると瞳を潤ませている。

ラルフは、といえば、しばらく黙って国龍を見つめていたが、それから、くるり、と背中を向け、

「私の誕生日は二カ月も先だ」

「あ、やっぱり覚えてた？」

子供の嘘、というのは、どこか間が抜けているものである。

そして、国龍の嘘は、思いつきり間が抜けていた。

「——言いたくない理由があるのか？」

「別に……。水龍のことを考えてたら、ちよつと泣いちゃって、みつともないから、涙が止まるまで木の上にいよーかな、なんて……。ほら、庭から部屋に戻るまでに誰かに見られたらイヤだし、庭に誰か出て来るかも知んないし……。で、木に登ったんだけど、枝が霞んで見えて、それで、うつかり足を滑らせちゃって……」

「悪かった。それ以上、言う必要はない……」

そんなこんなで、四年の歳月が過ぎて行つた。

国龍に取つては覚えなくてはならないことが山ほどある四年間であり、また、水龍のことを考えて、もどかしい思いになる長い歳月であつた。

一九九四年、春——。

雨季を終えたロサンゼルスは、青いテーブル・クロスを広げたよな、美しい空を覗かせていた。

十二月から三月の雨季を除けば、この街は、ほとんど快適な氣候が続くのだ。

その陽光の下、緑生す美しい庭の中で、国龍とラルフは、珍しくゆつたりとした朝食の時間を持つていた。

「あんたがデイ・オフなんて、珍しいよな」

今ではもうすっかり慣れたテーブルマナーで、簡単な食事を取りながら、国龍は向かいの席へと視線を向けた。

「私にも休みはあるさ」

アメリカ中の新聞を取っているのではないか、と思える何部もの新聞を読みながら、ラルフが応える。

「それが休日のごし方かい？」

朝から活字を相手に朝食を取るラルフの姿は、どう見ても仕事である。

「そうだったな。君とも少し話した方がいいかも知れない」

「ぼくは……別にいいけどさ」

「無理をするな。この四年間、弟のことを考えて、さぞ齒痒い思いをしていただろうからな」

新聞を傍らに置いてのその言葉は、全てを見透かすものであった。国龍は黙って、パンをちぎった。

アメリカでのし上がるためには、それなりの知識を身につけなくてはならない、と解っていても——それが最良で確かな近道だと解っていても、その時間がじれったくて仕方がなかったのだ。

run ???

自分がこうしている間に、水龍は酷い目に遭っているのではないか。

こんなことをしている間に、水龍を捜し出すことが出来るのではないか。

そんなことを考えたのも、一度や二度では、ない。

そして、アメリカの広さを思い出して、何とか自分を抑えるのだ。この広大な大陸の中で、たった一人の密入国者を探すことが、どれほど大変なことであるのかを、自分の胸に言い聞かせて。

「君の美国籍も取れたことだし……」

「二年も前の話だよ。それも、政界のコネだろ」

「フツ。利用できるものは利用する。お互い、持ちつ持たれつだ。

——今年の夏で、十七だったか？」

「ああ」

「体が出来ていないから、ショー・モデルは無理だな。フォト・アチストに会わせてやろう。君が気に入られるかどうかまでは保証できないが」

「本当にそう思ってる訳じゃ、ないだろ？」

「——。大した自信家だ」

本当に自信があつたのか、と訊き返されても、国龍は、もちろん『YES』と応えていただろう。この四年間、それだけのことをして来たのだ。そして、年月を経た面貌も、その自信を裏付けするように、さらに美しいものとなっていた。

「ぼくは絶対、のし上がって見せる……。アメリカ中の人間が、ぼくの顔と名前を覚えるくらいに」

と、格好よく決める。が、ラルフはもう、新聞の続きを読み始めていたりする。

これでは格好よく決めた意味がない。

「おいつ、ぼくと話をするんじゃないのかよっ」

国龍は、ムツ、としながら、テーブル越しにラルフの顔を睨みつけた。

「もうしただろ」

どうやら、本当に「少し話をする」だけだったらしい。

それを見て口を開いたのは、丸々と太ったメイドであった。

「旦那様っ、もう少し親身に坊っちゃんまと話をして上げてくださいますっ」

と、きつい口調で、ラルフを咎める。

「ん、ああ。この記事を読んだら——」

「旦那様が大切になさっている本を、留守の間に燃やしてしまいますよ」

「……いい性格だな、ミセス・倩玉^{チンユイ}」

「もちろんでございますとも」

「SIGH……」

大きな溜め息が、零れ落ちた。

どうやら、ラルフにも勝てない相手がいるらしい。

これは新しい発見であった。

そして、国龍がその発見を利用することを思いついたのも、当然の成り行きであった。丸々と太ったメイド——倩玉^{チンユイ}というのだが——の方を寂しげに見上げ、

「ねエ、倩玉^{チンユイ}、ぼく、一度でいいから、ラルフと一緒に出掛けたいな……。ぼく……家族もいないし、とーさんも知らないし……」

と、不憫な境遇を口にする。

倩玉^{チンユイ}の瞳が、たちまち潤んだ。

「ええ、ええ、解っておりますとも。私からも旦那様をお願いして差し上げますよ。こんなに愛らしい坊っちゃんを一人にしておくなんて……。どんなに寂しい思いをなさっていたか……。もうお可哀想で、お可哀想で……」

と、ボリユームのある胸の中に、ギューっ、と国龍の頭を抱え込

む。

危うく死にそうになったので、次からこの手は避けたい。それでも……倩玉^{チンユイ}の胸の中は柔らかくて、暖かくて、何故か離れたくないような気が、していた。人の肌の暖かさを思い出したせい、だっただろうか。もう何年も——恐らく、水龍と離れ離れになってから、ずっと忘れていたものなのだ。

向かいの席では、ラルフが倩玉^{チンユイ}に責め立てられ、憮然とした顔で、国龍の顔を睨んでいる。

もちろん、国龍は気にもせず、つん、と鼻を澄まして、朝食だけを貪っていた。怒られたら、また倩玉^{チンユイ}にしがみついて、あの暖かさを感じてもいい、と、思っ、て、いた。

そして、その日は、朝からさっそく出掛けることになったのである。

run ???

「——ったく。新聞を読まないで、一日が始まった気がしない」

運転席でブツブツと文句を唱えながら、黒塗りのベンツを運転しているのは、もちろんラルフである。結局、倩玉チンユイの言葉には逆らえなかったのだ。

「気のせいだよ。ちゃんと一日は始まってると」

国龍は、上機嫌で請け負った。

「新聞は必ず読め、と君にも言っているはずだが」

「早起きして読んだよ」

「水龍の記事を探しただけだろう?」

「……。早くフォト・アーチストに会いに行きたかったんだ」

視線を落として、国龍は言った。

「フォト・アーチスト? 今日?」

「ああ。会わせてくれる、って言ったじゃないか」

ラルフの表情が、頭痛を堪えるように変わったことは、言うまでもない。

「どこの誰がアポも取らずに会ってくれんだ。しかも、そんな思いつきりの普段着で——。私に恥をかかせる積もりか?」

「……」

「少なくとも、私は君に恥をかかせる積もりはない。待っていれば会わせてやる。向こうから『君を撮りたい』と思わせるような最高の被写体に整えてから——。それが頭の使い方だ。いい顔がくっついていれば相手にしてもらえる、というものじゃない」

「……。まだ、頭悪いかな、ぼく」

「いや——。私が待たせ過ぎたんだろう。君の四年間は、私と違って随分、長かっただろうからな」

いつも、言うべき言葉を心得ているのだ、彼は。それが、経験によつて得たものなのか、生まれついて持っていた才能であるのかは

判らないが、国龍には信頼できるものであった。

「……そのフォト・アーチストって、どんな奴なんだ？」

と、気を取り直して、問いかける。

サイキアリスト

「精神科医から写真家に転向した変わり者だ。まともに行っても、会えはしない。君のように、自分を売り込みたがっている名もない新人はもとより、話題を欲しがる女優やモデルも」

「傲慢な奴」

「彼に媚びる必要はない。私も君にそんな真似はさせない。傲慢はお互い様だ」

「何でそんな写真家がいいのさ？」

「人間の狂気を見て来た彼の作品は、他の写真家とは全く違う。君のデビューも、ショッキングでセンセーショナルなものになるだろう」

「ヘエ……。あんたがついていれば、誰でもアメリカン・ドリームを適えられそうだな。他人の秘書なんかしてないで、自分でやってみたらどうだい？」

「フツ……。私には今のポジションが合っているのさ」

その言葉の意味は、国龍にも何となく解った。ラルフのように、新聞の隅々まで目を通さなくては気が済まない人間は、裏方の方が性に合っているのだ。表立って、くだらないパーティに出席したり、名刺を交換したりしなければならぬ役職は、時間の無駄遣いのように思えて、満足できないのだろう。悪く言えば、他人を信用していない、とも言えるし、人付き合いが悪い、とも言える。

だが、そんな彼が、自分の時間の全てを使って仕えてもいい、と思った人物とは、一体、どれほどの人間だというのだろうか……。

「……忙しいのに、随分、ぼくに親切にしてくれるんだな。福州の置屋で客を取っていたガキに」

「……」

「あんたは最初から、普通の客とは違っていた。——いや、判らない。確かにあんたはぼくを助けてくれたけど、あの置屋から連れ出

してくれる気はなかったはずなんだ。連れ出す気があったのなら、最初からそうしてるだろうし、もっと早く連れ出しに来たはずなんだ。それなのに、あんたは四年も経ってから、ぼくをあそこから連れ出した。もちろん、あんたが忙しい人間で、あんたに取っての四年間は、あつと言う間の歳月だつてことも判ってる。だけど、最初からぼくを連れ出す気がなかったことは確かなんだ。――何故、ぼくの身請けをしてくれたんだ？　ごうつくな？　に大枚叩いてまで何故、こんなガキを引き取ってくれたんだ？　ぼくは、あんたに気に入られるようなことを何かしたかい？　見ず知らずの人間に、何でこんなに良くしてくれるんだ？　何故、水龍を探すのを手伝ってくれるんだ？　もし……もし、ぼくがああ置屋で、廃人になっていたらどうする積もりだったんだ？　あのまま引き取らずに放っておいたかい？　正気で生きていたから、仕方なく引き取ってくれたのかい？　もしそうなら、何のために？　ぼくには何も解らない……」

国龍は、いつまで経っても解けない疑問を、ラルフの前に持ち出した。

run ???

海を見渡せる場所に来て、車が静かに動きを止める。

「もう教えてくれないだろうか？」

もう、人の話を理解できない子供ではないのだ。

「……そうだな」

そう言つて、ラルフは銜えた煙草に火を点けた。

「一つは、君が持つその瞳に惹かれたからだ。鋭く強かなその瞳に――。あのまま、一生、あの置屋で客を取らせておくのはもったいないと思つた。だから、チャンスを与えてやつた」

やはり、婆婆は、国龍を一生あそこに閉じ込めておく積もりだつたらしい。

「それが、＼運が良ければ洛杉礮で逢える＼つていう、あれかい？」

「ああ。――だが、私を頼つて船に乗つたのは、君の弟の方だつた。そして、その弟はいつまで経つても姿を見せず……。私もなかなか仕事を離れることが出来なかつた」

「……。何故、あの置屋に来たんだ？ 子供を抱く趣味があつた訳じゃないだろ？ あんたは一度もぼくを抱かなかつた。LAで暮らすようになってからも」

青い煙が、車の窓から、外に流れた。

「あそこは、俗な言い方をするなら＼組織の陣＼だ。女たちが稼いだ金は、組織の活動資金になる。君が稼いだ金も――。私は銀行で表の金だけを扱っている訳ではないのさ」

別にそれを聞いても、国龍は驚きもしなかつた。それは、聞くまでもなく察していたことであり、今更改めて聞くようなことでもなかつたのだ。

「ぼくを部屋に呼んだ理由は？」

国龍は訊いた。

「別に君を指名して呼んだ訳ではない。新しい子供が二人入つたこ

とと、その子供に近く客を取らせることは、前以て私の耳にも入っていたが――。様子を見に行ったら、??が気を回して、私に一人、その子供をあてがってくれた。それが君だ。――二度目は私が呼んだんだが」

「……」

「私は、幼い子供が客を取らされているのを見ても、何とも思わない人間なのさ。全てその子任せだ。救ってやりはしない。救い切れない人数だ」

そう語るラルフの表情からは、何の感情も読み取れなかった。

もし、彼を悪人だ、と言うのなら、少女売春、少年売春の事実を知りながら、可哀想だ、と言うだけの人間は、善人だ、とでもいうのだろうか。新聞を読みながら、口先だけで憫れみをかけ、何もしい連中は、常識を持っている、といえるのだろうか。

その現実を知りながら、それでも自分たちには関係のないことだと、明日には忘れている人間ばかりではないのか。

口先だけで偉そうなことを言いながら、行動を起こさない人間は山ほどこいる。そんな人間に、他人を責める資格がある、というのだろうか。

「……あんたはぼくを救ってくれたさ」

たとえ、たった一人でも、彼は確かに救ってくれたのだ……。

国龍がその写真家と会ったのは、ビバリー・ヒルズの、まさしく城と呼ぶに相応しい、目を瞠るような豪邸で催された、パーティの席であった。

ハリウッドの西側に隣接する高級住宅街である。

そこは、国龍が知る中でも、贅沢のケタが違っていた。きらびや

かな人々も然り、訳の解らない人々も然り――。

それでも、一向に怯む様子もなく、グラスを片手に立つ国龍の姿は、人目を惹きつけるに充分なものであったに違いない。

人々の視線と囁きも、国龍を垣間見ては、続いていた。

「随分、きれいな子ね……。中国人か日本人みたいだけど」

「ついに日本人はハリウッドまで脅かすようになった、ってか？」

「あの子なら、それも冗談ではないかも知れないわよ」

黒のタキシードと、きれいに撫でつけられた艶やかな黒髪――その容姿もさることながら、国龍にはどこか独特の雰囲気があったのだ。それは、過去、というものであったかも知れないし、目的、と呼べるものであったかも知れない。人を恍惚と酔わせる、芥子の夢のような魅惑があったのだ。特別なことをする訳でもないのに目立ち、そこだけライト・アップされているかのように際立ち、決して人込みに埋もれることなく、仄かな光さえ発して輝いている。そんな不思議な魅力を持つ少年に、声がかからないはずもないだろう。

run ???

「ハイ。君は新人かい？　ぼくは作る側の人間なんだけど、よければ話をしたいな」

軽薄を絵に描いたような、ハリウッドの人種であつた。口調も年齢以上に若々しい。

「最近公開された映画では、《スケープゴート》や《ダーザイン》なんかがぼくの作品なんだけど――。観てくれたかい？」

と、観ていて当然のような口調で、問いかける。

「ああ……。どっちも観た。ちやちでつまらない映画だった」

「――」

国龍の言葉に、どよつ、とホールがざわめいた。

後ろでは、ラルフが苦笑のように、皮肉げな唇を歪めている。

男の顔は、引きつっていた。

「ハ……。ハハ。子供には少し難しい話だったかな。登場人物に神秘性を持たせるために、子供が好きそうな人間味を持たせないように書いたからね。あれは全米で話題を独占した最高作なんだよ。一般人が持っているようなモラルやコモン・センスはもちろん、目に見える優しさや哀しさも持たせては――」

「失礼……。ぼくの言葉が気に障ったのなら、謝ります。ぼくは子供なので、あなたの作品の良さがよく解らない」

国龍は、流れるような口調で、淡々と言った。

「あ、ああ、そうだろうね。気にしてはいないさ。子供にはまだ解らないだろうからね」

この場合、取り繕うような男の言葉は、傍目には、余計にみつともないものとし映らなかつたに違いない。

そして、国龍が子供でなければ、こうも事なく収まらなかつただろう。加えて、今の言葉で、国龍の存在は、一層、皆の関心の的になつていた。

バルコニーで、グラスを傾けていた男も、国龍の姿をじっと見据え、そこから足を踏み出した。

「あの男がフォト・アーチストのステイブ・F・コーエンだ」
ラルフが小声で耳打ちをした。

男は四五、六歳だろう。クセのある黒髪をオール・バックにし、後ろで一つに結んでいる。精神異常者を見過ぎて来たためか、普通の人間になど面白味も感じない、といった顔付きをしている。

その男の足が、国龍の前で、ピタリ、と止まった。

「年は？」

と、周囲の視線など気にも止めていない様子で、問いかける。

「……いきなり年を訊かれたのは初めてだ。不躰な人だな、あなたは」

国龍は、不敵な眼差しで、男を見上げた。

「フツ。目を見れば解る。君が年相応の少年でないことも、普通の少年でないことも」。私はステイブ・F・コーエン。写真を撮っている。もちろん、人物だ」

男は先に名前を名乗った。

「名前は存じていますよ、ミスター・コーエン。ドクター・コーエンの方の名前も」。ぼくはロン・ウェイ。肩書と過去はありません」

「……。過去はない、か」

「ええ。――創っていただけですか、あなたの手で。過去と今、そして、狂気と逃亡先を――。未来は要らない。それはあなたには創れない」

その言葉に、また、ホールがどよめいた。

大の大人と、わずか十六、七歳の少年が、駆け引きのような会話を交わしているのだ。それも、どちらも引かない眼差しで。

何とも言えない空気が漂っていた。

それを破ったのは、一人の華やかな女であった。

「クスクス。可愛い坊やだこと。――でも、残念ね。ミスター・

コーエンは私の写真集を撮ることになっているのよ。これからすぐにパリへ——」

「引き受けよう」

それは、コーエンの言葉であつた。華やかな女の方には目もくれず、国龍を見据えて、そう言ったのだ。

女はもちろん、目を見開いている。それでも、プライドもあるのだろう。

「その話はパリから戻ってからにしてください。——あなたも失礼よ、坊や。無名の新人が名声を手に入れたのは解るけど、ここで仕事の話を持ち出すなんて——」

「私はパリへ行くとは言っていない。君の写真集の話も断つたはずだ、ミス・シャロン」

そのコーエンの言葉に、女はさらに目を見開いた。

「何ですって……。そんなことが——」

「私がこのパーティに出席したのは、君のマネージャーに、どうしても一度会ってから決めて欲しい、と泣きつかれたからだ。もちろん、会ったところで、私には君を撮る積もりなどなかったが」

「——」

「君のような有名女優を撮りたがる写真家は、いくらでもいるだろう。私の出る幕はない。失礼するよ。——行こうか、ミスター・ウェイ。君もこのパーティを楽しんでいないようだ」

その日のパーティでの出来事は、翌日には業界中に知れ渡り、国龍とコーエンの契約の話も、マスコミが毎日のように取り上げるように、なっていた……。

run ???

傲慢で自己中心的なフォト・アーティスト、ステイブ・F・コーエンが、国龍を撮りたい、と思った理由は、いくつか上げられるだろう。

そして、それは、当人が口にするまでもなく、周囲の人間にも容易に知り得ることであつたに違いない。

人を惹きつける何かがあるのだ、国龍には。東洋人独特の神秘性や、その美貌はもちろん、普通の少年には持ち得ない何かが。

だからこそ、コーエンも国龍を撮りたいと思つたのだろう。レンズを通して何が浮かび上がつて来るのかを。

妙に大人びた瞳を持つ少年が、何を見つめているのかを。夢と絶望、狂気と安らぎ、逃亡と戦……それらの果てに何かがあるのかを。

もちろんそれは、国龍に取つては、どうでもいいことであつたが。「どうだ、撮影の方は？」

夜中近くに帰つて来たラルフが、ネクタイを耑り取りながら、近況を訊いた。

「ん……。別に。写真の腕にも、出来栄えにも興味なんかない」
ニユースを見ながらソファに寝転び、片手間のように、国龍は言つた。

「まあ、そんなところだろうな。——だが、個展が当たれば、君の名は一躍しA中に知れ渡る。コーエンの名で売れる訳ではない。君という全く新しい被写体が、ビジュアル・アーティストの腕を凌いでの上がるんだ。——楽しみに待っている。個展が成功して名が上がるのはコーエンではない。君だ。君という

未知数の存在が、新しい時代を創り上げる。羨望と妬み——形は違っても、君の名を知らない者などいな

くなる。そして、それは、君が目的に近づくための、一番の近道だ」
何という自信家なのだろうか。彼は、自分の腕を確かなものとして自負しているのだ。

そして、そんな彼の言葉は、誰もがうなずいてしまうほどに、確信に満ちたものであったに違いない。

「楽しみにしてる、って言われても……。今日なんか、カメラの前で三回も手淫マスターベーション

させられたんだぜ。『人間が一番、人間としての理性を失くす狂気に近い瞬間だ』、とか訳のわかんないことを言ってるさ。あいつ、サイキアリスト精神科医じゃなくて、患者の方だったんじゃないのか？

でなけりや、マッド・シュリンクとか」

「……。あー、コホン。別に、何から何まで言うことを聞く必要は、だな……」

「別にヌードだって何だっていいんだけどさ。顔さえ写ってれば」
何とも言えない顔のラルフを傍らに、国龍は無関心な口調で、テレビを消した。

国龍も、幼い日は、ラルフのいうサクセス・ストーリーを夢見たことがあったのだ。

だが、今は、もつと別の目的を持っている。

「でも、ぼくのヌードなら、チンコイ倩玉も喜んで見てくれるかも知れないな。『まあ、ロン坊っち

やまもご立派になって』とか言ってる」

と、得意げな顔で、太ったメイドの口真似をする。

「あんなア……」

ラルフの疲労がピークに達したことは、言うまでもない。

「まあ、一応、あのマッド・シュリンクの話では芸術作品らしいか

ら——。ぼくも悪口を言う気はないけど、あんたみたいな人間と長く暮らしていると、どいつもこいつもつまらないまがい物にしか見えなくなる」

それは、最高の褒め言葉であつたかも、知れない。

そう——。コーエンは決して、腕の悪いアーティストではないのだ。それどころか、独特の感性を高く評

価されている最高の芸術家^{アーティスト}である。彼の創り上げる作品は批評家を黙らせ、人々を呆然と

圧倒させる。

それでも、国龍が冷めた眼で見ってしまうのは、やはり、さっきの言葉通り、ラルフとの暮らしが長かつたせいだろう。

撮影は、以後も順調に進んでいた。——いや、進んではいたが、その順調さとは裏腹に、舞台裏では、金を使つての醜い攻防が続いていた。あのパーティでコーエンに写真集の契約を断られた女優が、業界での顔とコネクションを使つて、国龍とコーエンを潰しにかかったのだ。また、それだけのことを本当にやってのける力のある女優であつた。もし、今回の個展の計画が、国龍とコーエンの二人だけのものであつたなら、二人は個展を開くことも出来ず、どこのマスコミにも相手にされなくなつていただろう。

だが、そうはならなかったのだ。

「妨害をやめろですって？　どうということなのよ」

弱腰になるマネージャーへ向けての、女優の言葉であつた。

「私は顔を潰されたのよ。あんなチビの中国人と、頭のイカれたアーティストに——」

「それどころじゃないんだ。政界や実業界から、とんでもない圧力

がかかっている」

「当然でしょ。あの二人が私にしたことは、潰されても仕方のないことだわ」

「逆だ。あの二人ではなく、君とプロダクションに、だ」

「――。何ですって……。どういうことなのよ！」

「知るもんかつ。とにかく、これ以上、個展の邪魔をするようなら、潰されるのは君の方だ、というこ

とだ。あの少年には、とんでもないバックがついている」

「そんなことって……」

run ???

ラルフのやることには、いつも微塵の抜かりもなかった。それを自分の仕事——本来の秘書という仕事と両立しながらやっているのだから、まさに、神業、としか言えなかっただろう。

そして、そうして頭を使って生きている時が、彼には一番楽しい時なのだ、ということも、国龍には解っていた。多分、初めて心を許すことが出来た他人が、ラルフ、だったのだ。

「何か臭うな……。何の匂いなんだ、これは？」

そのラルフの言葉に、

「まだ臭う？ 二回も風呂に入っただけどなア……」

クン、と自分の匂いを嗅いで、国龍は言った。

「訊きたくはないが……何をしたんだ？」

今まで遭って来た被害からすれば、当然の問いかけであっただろう。

「あのマッド・シュリンクに、いきなり下水道に連れて行かれてさ。臭いのなんのつて——。今日はそこで撮影してたんだよ」

「……ご苦労様」

仕事でついた匂いとなれば、ラルフも文句は言えないらしい。

「個展のタイトル、決まったよ」

「ほう。——何だつて？」

「Runaway」

《Runaway - 逃亡者》

そのタイトルで開催された個展は、《狂気》というコーエンの一

貫したテーマの元に出来上がった最高傑作である、として、多くの批評家やジャーナリストたちに高い評価を受けることになった。

もちろん、その一番の話題の中心人物となったのは、無名の新人モデル、ロン・ウェイである。——いや、昨日までの無名新人、ロン・ウェイ。

個展開催日の今日、国龍は、その名をLA中に知らしめていた。

中には、コーエンがそのモデルを有名にしたのではなく、モデルがコーエンの名を更に高めたのだ、という皮肉屋もいた。——いや、それは本当に皮肉だったのだろうか。少なくとも、ラルフに取っては、その批評こそが正当なものであつただろう。

芸術と猥褻の狭間で、モノトーンに彩られる東洋の少年の美しい肢体は、妖しい色香すら含んでいた。

けだるげな表情、達した刹那の白い唇、魔物のような危険な眼差し、狂人の如き凄まじい絶叫と鬱……それから下水道の美醜の中で、鉄格子の部屋の片隅で、何も無い虚無の空間で、暗く透き通った海の底で、淫靡に、貴く、色づいているのだ。

妖魔——人はそう呼ぶかも知れない。そんな人外の、そして、幻想的な魅力が、写真の中の国龍には、あつたのだ。

その魅力を前にすれば、男も女も、ほんの少し淫らになったに違いない。

そして、アーティストたちは、天使のような、と形容される馬鹿馬鹿しい清纯派モデルを撮りたくもなくなるだろう。況してや、創りたくも、描きたくもなくなるだろう。

得体の知れない魔と神秘こそ、人々が畏怖し、また、求めて来たものののだ。

その個展は、ラルフが言っていた通り、ショッキングでセンセーショナルなものとなっていた。

「ミスター・ロン・ウェイ。かなり衝撃的なカットが多いようですが、それに対して抵抗はありませんでしたか？」

会場の熱気に包まれながら、記者たちも興奮気味に質問を飛ばす。

「……別に」

国龍は、終始冷めた口調で受け応えていた。

「確か、この夏に十七歳になったばかりでしたよね？ 周囲の反応や、あなた自身の心境の変化は？」

「……あつたとしても、あなた方には解らない」

「は？」

「この写真はぼくかも知れないし、ぼくではないかも知れない。この写真を見て、ぼくの狂気が解る人間がいるとすれば、たった一人

……」

「一人？ それは誰ですか？ やはり、ミスター・コーエン？」

「……」

誰にも解るはずなどないのだ。コーエンにも批評家にも……。解る人間がいるとすれば、八年前に失った半身、ただ一人……。

run ???

「と、年に似合わず無口だな……。では、ミスター・コーエン。今回のあなたの作品を、芸術ではなくポルノだと中傷する批評家もいるようですが、その点について何か？」

「他人に批評してもらう積もりなどない。撮りたいものを撮っているだけだ。俗物に私の芸術を理解してもらおうとは思わないさ」

「は、はア……。では、あなたご自身では、これを芸術だと？」

「以前、芸術家と精神異常者を同義語として結んだクランケがいた。彼の世界では、芸術家と精神異常者は同じものだ——。私も彼の《世界》に同感だ。目の前にある世界しか見えない正常者よりも、全く別の世界を持っている彼らの方が、よほど芸術家の名に相応しい。もし、私が狂っているのであれば、これは間違いなく芸術作品であろうし、私が正常なら、これは美しく淫らなポルノかも知れん。そして、私は自分を正常だと思ったことなど一度もない。己を正常だと思い込んでいる狂人ほど、愚かな者はいないからな」

「は、はア……」

記者たちも、媚びることをしない二人が相手では、なかなか会話が弾まないらしく、額に冷たい汗を浮かべていた。

《逃亡者》

幼い子供が右も左も判らない世界にいきなり飛び出し、海を目指し、大きな夢を持って決意した逃亡。そして、欲望に塗れた大人たちは、その幼子たちの行く手を塞ぎ、閉じ込めた。

そんな哀しい逃亡者の姿は、虚無の空間や鉄格子の部屋、下水道の中に刻まれていた。

なら、海に沈むその姿は——そのカットは、何を示すものであったのだろうか。

「……ぼくは疲れたので、これで」

まだ記者たちの質問が続く中、国龍は蒼冷めた面で立ち上がった。

血の気が引き、息が詰まり、足も心なしかフラついている。

「え、ちよつと待つてくださいよ、ミスター・ロン・ウェイ——」

国龍を引き留めようとした記者の言葉は、突然現れた長身の男を見て、ハツ、と止まった。

言葉が続かない内に、長身の男は、国龍を支えて控室へと翻る。

「お、おい……今の男、黄中元の片腕、ラルフ・リーじゃないのか……？」

二人の姿が見えなくなると、記者の一人が、呆然としながら口を開いた。

「じゃあ、あの少年のバックに政財界の大物がついてる、って話も、やっぱり本当だったのか……？」

「下手なことは書けないぜ。こっちの首が飛んじまう……」

創る側が芸術を志していようと、それを扱う側は、決して芸術だけでは動かないのだ。金が絡まり、コネクションが絡まり、その中、常に人の顔色を窺いながら動いている。

「大丈夫か？」

控室に入り、そう訊いたのは、ラルフであつた。国龍をソファに座らせての、問いかけである。

「水龍は……死んだかも知れない」

「……」

「体が弱かつたんだ……。ぼくは、海の広さも知らなかった。だから、水龍に逃げると言つたんだ。海には魚がいるから、食べるものにも困らない、と思つていた。——でも、今は色々なことを知っている。あんな広い海を、水龍が渡れたはずもないんだ。海を渡り切るまで、水龍の体が持ったはずがないんだ。あの写真は……あの力ツトは、ぼくじゃない。あれは……あれは、水龍の姿が写っているんだ。海に沈んだ水龍の姿が……」

「……。少し休むといい。やっと目的に辿り着いて、精神が不安定になっているんだ」

「違つ……。怖いんだ」

「国龍？」

「怖い……。これで水龍が見つからなければ……。水龍がぼくの前に姿を見せなければ、水龍は、もう……。そう思うと、怖くて……。不安で……。ぼくはどうしたらいいのか解らない……。」

国龍は、頭を抱え込むようにして、震える声で呟きを落とした。

run ???

今までは、水龍が連絡をして来ないのは、国龍の居場所が解らないからだ、と思い込むことが出来ていたのだ。そう思い込むことで、水龍が生きている、と信じ込むことが出来ていた。水龍がラルフの処に姿を見せなかったのも、長い船旅でラルフの名前を忘れてしまっていたからだ——。

だが、今回は、違う。この個展を切っ掛けに、国龍の顔と名前が全米に知れ渡ることになれば、そんな逃げ道は通用しなくなってしまう。

水龍が生きているのなら、ロン・ウェイが国龍であると察し、国龍の前に姿を見せるはずである。もし、姿を見せなければ、それは——。今までの国龍の八年間は、根底から覆されることになってしまう。

「い……いやだ……」

「国龍？」

「いやだ……。水龍は死んでなんかいない……。ぼくと水龍は双子なんだ……。水龍が死んで、ぼくだけが生きているなんてことは——」

「眠るんだ、国龍。今は私の言うことを聞け。君を精神病院へ入れることになるのは、ごめんだ」

「……」

「さあ、目を瞑って……。何も考えてはいけない」

「ぼくは……」

「黙って——。写真を撮られることは、気分を高揚させるし、別の人格を見せられたような気分にもなる。その昔、写真を撮られると魂を抜かれる、と信じていた民族がいるように……。君は写真のセットの中に迷い込んで、知らない内に精神まで引き込まれていたんだ。コーエンがテーマにしている《狂気》のせいもあっただろう。」

自分の狂気を見せつけられて、平気でいられる人間などいない。――さあ、眠って。眠れば落ち着く。そのために私がいるんだ」

そのために、ラルフが……。そのラルフの言葉は、国龍の頭の中に、心地よい振動で伝わっていた。

慰めの言葉を持ち出すでもなく、くだらない励ましをかけるでもなく、また、余計な期待を持たせるでもなく……。そんなラルフの心遣いが、国龍には何より心地よかった。

たとえば、ラルフが『水龍は必ず生きている』と言ったところで、国龍は、信じることもしなかっただろう。そして、ラルフも、そんな調べてもないことを、軽々と口に出したりはしなかったに違いない。――そう。ラルフは一度として、水龍がまだ生きている、と言ったことなどないのだ。ただ、探すのを手伝ってやる、と言っただけで――。他の誰に、そんな真似が出来る、と言っただろうか。

個展は変わらず、続いていた。

悲しい歌を聴けば、気分も沈むように、狂気の写真を目の当たりにすれば、心もそれに引きずられる。その写真が美しければ美しいほどに、シヨッキングであればシヨッキングであるほどに、人々の精神に深く巣くくる。

幻想的な狂気が、魅惑的な妖気が。

もちろん、それは常人だけではない。見た人間、全てに。

《逃亡者》は、人々の精神に強烈な衝撃を植え付け、一般公開が始まる二日目からも、人々の魂を奪い続けた……。

run ???

「なになに。《日本製の小型車、トップレス、ヒッピー、同性愛者同士の結婚……と、さまざまなものを、先頭を切って既成の枠から外して来た西海岸に、今世紀最大にして最後の枠を外す者が現れた》……大袈裟だなア。こんなつまらないことしか書けないのに、何でライターなんかやってられるんだ」

個展も終わり、あれからすっかり立ち直ってしまった国龍は、週刊誌の記事を眺めながら、形のいい眉を不機嫌に顰めた。

何故、狂気に引きずられることなく立ち直ってしまったのかは、ぐっすりと眠ったから、としか言いようがない。——いや、ラルフの側で、ぐっすりと眠ったから、だっただろうか。

別にそれを不思議とは、思わなかった。水龍の生死についての不安が消えた訳ではなかったが、ぐっすりと眠って目を醒ました時、あの追い詰められるほどの息苦しい不安から、抜け出すことが出来ていたのだ。

一つのことが終わった時の高揚感は、国龍が考えている以上に、凄まじいものであつたらしく、特に、写真を撮られていた時の精神の変化にも気がついていなかった国龍には、予想すらしてはいないものだったのだ。

そして、ラルフはそれに気がついていた。撮影中から、国龍の精神状態が少しずつ変わり始めていたことも、それがピークに達した時、自分自身が見えなくなってしまうであろうことも——。

もしかするとラルフも、大きな仕事をやり終えた時に、そんな高揚感と精神の変化を味わったのかも、知れない。だからこそ、国龍が一番不安になつてしまう時に、一人にさせることなく、側についてくれたのだらう。

そして、個展の評価は、ラルフの言葉通り、コーエンよりも、被写体である国龍の方が、ずっと大きく扱われていた。

「こつちにもロン坊っちゃまの記事が載っていますよ。ほら、こんなに大きく――。私なんて、もう嬉しくて嬉しくて、一時間置きに個展に通って、お陰で二キロも痩せましたよ」

丸々と太ったメイド、倩玉は、少女のように頬を染めて、痩せた体を見下ろした。

「あ……そう。そういえば、最近痩せたかな、っていう気がしてた。――気のせいかと思ってたけど」

二キロや三キロの問題ではないと思えるのだが、国龍は、全く変わっていない体型を見ながら、女性に対する礼儀を守った。

ちなみに、最後の一言は、どうしても喉で止めておくことが出来なかった、本音、である。

だが、倩玉には聞こえていなかったらしく、まあっ、と嬉しそうに頬など染めている。

「わざわざ個展に行かなくても、風呂で毎日見れるのに。それ以上痩せたら、ガリガリだよ」

その言葉には、さすがに皮肉だと気がついたらしい。ムッ、と顔を膨らませている。――いや、これは元からだ。

「バス・ルームで見るのとは違いますよ。とても繊細で、傷つきやすく、臆病な小鹿を見ているようで……。あの写真を見ていると、涙が止まらなくなるんですよ」

「……？ それ、誰の個展？」

国龍は、倩玉の言葉に首を傾げた。

ジャーナリストや批評家が書き立てているような批評とは全く違ったその言葉は、同じ個展を見てのものとは思えなかったのだ。

「いやですよ。ロン坊っちゃまの個展じゃありませんか」

「……そんなこと、初めて言われた」

「私には解りますよ。この四年間、ずっと坊っちゃまのお世話をさせていただいて来たんですから。こんなに愛らしくて優しい坊っちゃまは、世界中、どこを探したって見つかりはしませんよ」

「……ありがとう、倩玉」

これほど優しい人たちに囲まれて暮らし、それでも心が満たされない、と言え、それは罪になってしまふのではないだろうか。

四年前までの生活が嘘のように何不自由なく暮らし、モデルという社会的地位まで持つことが出来た、というのに、それでも心は満足してくれないのだ。

たとえば、唇。

あの汚い置屋の中で、たった二度重ねた唇は、ただそれだけで、心を一杯に満たしてくれるものであった。

そして、手。

小さな手を互いにしっかりと握り、逃亡を決意した時、心には希望だけが満ち溢れていた。

それから、温もり。

どんな寒い日でも、二人ぴったりと寄り添っていれば、すぐに体は温まった。もちろん、心も、暖まった。

あの日はもう、二度と戻っては来ないのだろうか……。

run ????

個展が終わると、休む間もなく、国龍は写真集の撮影に入っていた。その妖しい魅力が、全米の書店にバラまかれるのだ。

結局、個展の記事を見て、水龍が国龍を訪ねて来ることはなく、似た少年がいる、ということも、国龍の耳には入らなかった。

もちろん、他の地方にいて、簡単にLAまで出て来れない状況にいる、ということも考えられる。その考えを現実逃避、というならそれでもいい。きっと、希望という名で呼ぶ人間もいるはずだ。

冬には、その写真集も発売されることに、なった。

ロサンゼルスのは冬は、二月でも午前中は海辺で肌を焼き、午後からは山でスキーが楽しめる、という、四川とは全く違った気候で、クリスマス・シーズンの今、三〇度から零度の気温差がある、という。

精神異常者のような気候であった。

例によって、ラルフは仕事で忙しく、構ってもらえないので、国龍は一人、白い砂浜が広がるサンタモニカに訪れていた。

今頃、屋敷では、倩玉が国龍の行方を捜し回っていたかも知れない。こちらの方は、いつもうつとうしくらいに構ってくれる。そんな訳で、たまには一人になりたくて、やって来たのだ。

一つ付け加えておくと、仕事で忙しいはずのラルフは、必要な時は、何故か必ず国龍の側にいてくれたりする。これは、今もって謎の一つである。

「あいつ……何考えてるんだろ」

サンガラスを外し、国龍は、砂浜の白さに、瞳を細めた。

一人になると、普段は忘れていた問いかけが、ふと、心に横切るのだ。そして、解けない内に、また、胸の奥へと沈んで行く。

その日もまた、同じであった。

国龍の考え事は、すぐに水龍のことへと移り変わり、時間だけが、

その思いの深さを刻むように流れていた。

どれくらいそうしていただろうか。

国龍は区切りをつけるようにサングラスを掛け、本土へと続く海に背中を向けた。

夢のようなことを考えていた、と言ってもいい。海に来れば、水龍に逢えるのではないか、と思っていたのだ。八年も前に本土を出た水龍が、今頃、このロサンゼルスに着くはずもないというのに。

海辺のテラスでお茶を飲む時間も、つい、水龍の姿を探したりして、自嘲を零したりも、した。

その耳に、女の子たちの声が、煩わしく、届いた。いつまで経っても慣れない、耳障りな会話である。

「ねエ、あそこにいる男の子、ロン・ウェイじゃないの？」

「えー……。そうかしら。似てるけど、別人じゃないの？」

名前も顔も売れたが、サングラス一つで、東洋人の顔を見分ける自信がなくなるのだろうか。それに、写真集に載っている国龍の表情は、皆、過去のもののなのだ。

女の子たちの会話は、決め手がないように、続いていた。

「やっぱり、違うんじゃない？ 顔立ちも何となく幼いし。それに…… 本人が、自分の写真集を大事そうに抱えてたりする？」

それは、誰を見ての言葉だったのだろうか。少なくとも国龍は、写真集など抱えてはいない。

それなら……。

耳に届いたその会話に、国龍は、カップを置く手を震わせた。

心臓は、痛いほどに激しい鼓動を刻んでいた。

このまま振り返れば、多分、目が醒めて、ベッドの上にいるのだろう。そんな空しい夢を、今まで何度も見て来たのだ。今回も、きっと、その夢に違いないのだ。

だから、期待してはいけない、と解っている。また、その期待を裏切られて、哀しい思いをするだけだと。

それでも……。

国龍は、ゆっくりと声の方を振り返った。
女の子たちの視線を追うと、そこには……。

run ????

「……水龍？」

サングラスの向こうに映ったものは、胸苦しいほどに懐かしく、そして、愛しい弟の姿であった。

顔立ちや仕草は、国龍よりも、ずっと、幼い。——いや、国龍の方が、大人び過ぎているのかも、知れない。それでも確かに、双子と呼べる面貌で、あった。

「あ……」

頭の中が真っ白になり、言葉すら忘れてしまったかのように、喉の奥が、苦しく、なった。

手足が震え、席を立つ時に、コーヒーを、零した。

「水龍……」

国龍は、震える足で、踏み出した。

一步、一步、半身に、近づく。

幼い頃のままの笑みが、国龍を、見つけた。

「水龍」

国龍は、弾けそうな思いで、名前を呼んだ。

水龍は、首を傾げて、戸惑っている。水龍にしても、こんなところで国龍に逢うなど、思ってもいなかったのだろう。少なくとも、国龍はそう思っていた。

だが——。

「Hve m er du (あなた、誰)？」
ヴェム エール ドウ

水龍の口から零れたのは、その言葉であった。——いや、水龍ではない、のだ。どこの国の言葉なのかも判らないその問いかけは、彼が旅行者であることも示していた。フランス語でも、ドイツ語でもなく、況してやスペイン語でも、アジアの言葉でもない、異国の言葉。

「あ……あの……えーと……」

「Hva（何か）？」

「あの……いえ、人違いを……。すみません」

国龍は、一気に夢の底へと突き落とされるように、指を結んでうつむいた。

水龍によく似た異国の少年は、不思議そうに首を傾げている。

声が飛んだのは、その時であつた。

「マーニ！」

と、黒のボルボの側に立つ青年が、少年を呼んで、手招きをする。まだ二七、八歳だろうか。長い金髪と青い瞳が、秀麗な面貌を際立てている。

水龍によく似た少年は、その声を聞いて、振り返った。そして、タカタカと青年の方へと駆け出した。――が、途中で、パタ、と足を止め、国龍の方を振り返った。

「アディオ！」

と、人懐っこい笑顔で、愛らしく言い、また、青年の方へと駆けて行く。

「アディオ……」

国龍には、その言葉の意味も、況してや何語であるのかも、判らなかつた。ただ、聞き取れたのは、青年が発した「マーニ」という言葉と、少年が残したその言葉だけだつたのだ。

その夜、国龍は、午前一時までラルフの帰りを待ち、その言葉の意味を訊いてみた。

「アディオ？ ノルウェー語だな。マーニというのは名前だろう」と、ラルフは言った。

いつも思うのだが、彼には解らないことなどないのではないだろうか。

「ノルウェー……？」

「ああ。『Good bye』という意味だ」

「Good bye……」

そんな簡単な意味だつたのだ。

「それがどうかしたのか？」

「……別に」

国龍は、サンタモニカでのことを思い出しながら、視線を落とした。

他人の空似、というには、あまりにも水龍に似ていたのだ。——いや、国龍に似ていた、と言った方がいいだろうか。そして、水龍の面影を備えていた。もちろん、八年も会っていないのだから、今水龍がどんな風になっっているかなど、国龍には解らないことであつたが。

それに、太平洋で行方不明になつた水龍が、何かの間違いでノルウェーに流れ着くなど、どう考えてもあり得ない。

それでも、もしかしたら——。そう考えてしまうのは、諦めが悪いからだろうか。

もし、国龍がサングラスを掛けていなければ、あの少年はどういう反応を示していたのだろうか。

大事そうに、国龍の写真集を抱えていた、あの少年は……。

run ????

「あの、ラルフ……」

「ん？」

「ノルウェー語って難しい？」

国龍は訊いた。

「英語を覚えた時と同じくらいに一生懸命やれば、すぐに覚えられるさ。——勉強したいのか？」

「……。クリスマス休暇中に覚えられる？」

「二週間で？ 随分、無茶なことを言うんだな。——何かあったのか？」

「……話をしたい人がいるんだ。多分、クリスマス休暇を利用して来てる観光客だから、その間に」

「んー……。大抵のノルウェー人は、英語を話せると思うが、な。

中年以上の年代には無理だろうが、若い人間なら——。今日、私もノルウェーの海運王の息子と少し話をしたが、上手な英語を使っていたし」

「ノルウェー語を覚えたいんだ。今すぐに」

無理を承知で、国龍は言った。

「もう決めているのなら、何を言っても無駄だろう。——何の話をしたい？ 日常会話を覚えたい訳ではないだろう？」

ラルフの言葉は、暖かった。

国龍は、サンタモニカでのことを、ラルフに話した。

「——だから、訊きたいんだ。マーニ、って呼ばれてたその少年が、何故、ぼくの写真集を持っていたのかを……」

「……。レコーダーを持っておいで。必要な言葉を教えてやろう」
「ありがとう、ラルフ……」

少し早い、クリスマス・プレゼントのような時間であった……。

その頃、マーニ、と呼ばれたその少年は、ホープ・ストリートに建つ最高級ホテルの一室で、国龍の写真集を枕元に置き、スヤスヤと気持ち良さそうに眠っていた。

その傍らに、人影が立った。サンタモニカでマーニに呼びかけた青年である。北欧人のイメージに相応しい長い金髪を片手でかき上げ、青い瞳で、マーニの寝顔を見つめている。そして、枕元にある写真集に、手を伸ばした。

「……自分とそっくりな顔をした人間の写真を見て、どこが楽しいんだか」

と、薄明かりの中で、写真集をパラパラと捲る。

その気配に目を醒ましたのだらう。

「ん……」

マーニが煩わしげに、瞳を開いた。

「……エドウィンド？」

と、眠たげに目を擦りながら、青年を見上げる。

「時差ボケで昼寝をしたのに、よく眠れるな。ノルウェーでは朝の十時だ」

エドウィンドは、多少皮肉げに、それでも微笑ましげに、マーニの黒い髪を指で梳いた。

さらさらとしたその感触は、指に心地よく伝わって来る。

あふ、と愛らしい欠伸が、零れ落ちた。

「起きなくてもいい。冗談だ。ぼくももう寝るところだ」

その言葉に、一旦、目を瞑り掛けたマーニが、何かを見つけたように、大きく瞳を見開いた。

ガバっ、とベッドから身を起こし、エドウィンドが持つ国龍の――ロン・ウェイの写真集を引ったくる。

「痛……っ。マーニ？」

力任せの奪い方に、エドウィンドは、戸惑いを浮かべた。

だが、マーニは、そんなことなど気にも留めず、写真集を抱え込み、もう盗られまいとするように、毛布の中に隠している。

run ????

「……。そんなもの、盗りはしないさ。——だが、もう外に持ち歩くのはやめてくれ。君だって、そっくりな顔をした人間の写真集を持ち歩くのは恥ずかしいだろう?」

エドウィンドの言葉に、マーニはブンブンと首を振った。

「君は恥ずかしくなくても、ぼくは恥ずかしいんだ。——だいたい、LAに着いて一番にそんなものを買わされて。おまけに、ただの一度も離しはしない。ナルシストのゲイだと思われたらどうするんだ?」

「……」

マーニは頑なに、黙っている。

「——ったく……」

溜め息が零れ落ちたのも、仕方のないことであっただろう。

クリスマス休暇を利用し、このロサンゼルスに訪れ、最初に起こった事件が、これ、なのだ。空港からホテルへ向かう車の中で、いきなりマーニが騒ぎ始め、車を止めた途端、大きなポスターの貼り出された書店に走り出し、そのポスターの前から動かなくなってしまった。

ポスターの主は、マーニによく似た、ロン・ウェイという、中国系アメリカ人モデルであった。

連れ戻そうとしても、マーニはそこから離れず、揚げ句の果てに、エドウィンドはその写真集を買わされるハメになり、何とか書店の前から離れることが出来たものの、マーニはそれからずっと、その写真集を離さなくなってしまったのだ。眠る時さえ、こうして自分の側に置いている。それが何故なのかは、知らない。マーニに言わせると、胃の奥がキュッと痛くなって、手放なせないから、らしい。「解ったよ。持っていてもいい。——だが、袋か何かに入れて持ち歩くんだ。それくらいの譲歩はしてくれるだろう?」

大きく肩を落として、エドウィンドは言た。

マーニは聞き分けよく、コクリ、と一つ、うなずいた。

「お父様とお母様への言い訳は、自分で考えろよ。君にヌード写真集を——しかも男のヌード写真集を買ってやった、なんて知れたら、ぼくが怒られる。たとえ、可愛い弟のためでも、それはごめんだ」

その言葉に、マーニの瞳が、頼りなく、揺れた。エドウィンドを見上げ、泣き出しそうな顔で、訴えている。

「……。キスしてくれたら考えてやろう」

と、ほっぺたを突き出す。

小鳥が啄むようなキスが、そこに、触れた。

可愛くて、可愛くて、たまらなくなる瞬間である。

「ありがとう。一番良い手は、お父様にもお母様にも見つからないようにすることだ。——おやすみ、マーニ」

兄と弟の、何でもない、ただ暖かい時間であつた……。

眠る時間も惜しんで、必要なノルウェー語を丸暗記した国龍は、ロサンゼルスの主立ったホテルに電話を掛け、マーニという少年の滞在先を探していた。

困難を要するかと思っていたが、滞在先はすぐに割れ、その少年が、エドウィンド・ヘイエルダールという人物と共に、ホープ・ストリートの最高級ホテルに滞在していることが、判った。それが、一時間ほど前のことである。

いても立つてもいられず、国龍は今、そのホテルの一室を前にしていた。

あと、ドア一枚ぐり抜ければ、全てがはつきりとするはずなのだ。そう思うと、心臓が壊れそうなほどに、早鐘を打った。

口の中で、覚えたノルウェー語をブツブツと呟き、万全の体勢を整える。そして、ドアのノブに手を掛けた。が、開くはずもない。

当人は大真面目の大ボケであった。

「え、ああ、そうか。呼び鈴を押さなきゃ」

と、顔を真っ赤にしながら、再び呼吸を整える。

緊張が治まっていないことは、確かであった。

嬉しいのか、怖いのかは、判らない。あの少年が水龍であつたら、という思いと、水龍でなかったら、という思いが、頭の中に入り乱れていたのだ。

国龍は、意を決するように、呼び鈴を鳴らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1187y/>

逃亡者

2011年12月3日13時49分発行